

十二神貝十郎手柄話

国枝史郎

青空文庫

ままごと狂女

一

「うん、あの女があれなんだな」

大髻たぶきに黒紋付き、袴なしの着流しにした、大兵の武士がこういうように云った。独り言のように云ったのであった。

そこは稻荷堀の往来で、向こうに田沼主殿頭とのものかみの、宏大の下屋敷が立っていた。

「世上で評判の『ままごと女』のようで」

こう合槌を打つものがあつた。旅姿をした僧侶であつた。

「つまり狂人きちがいなのでありましょうな」

これも単なる問わず語りのように、こう呟いた人物があつた。笈おい摺ずるを背負つた六部であつた。と、その側にたたずゝいた、博徒のような男が云つた。「迫害されて成つた狂人な

のでしょうよ」

「『ね、もう一度ままごとをしようよ』こう云つて市中を狂い廻るなんて、お討厭だ、恥ずかしいことね」

すぐにこう云う者があつた。振り袖を着た町娘で、美しさは並々でなかつたが、どこかに蓮はすつ葉なところがあつた。

「それが一人や二人でなく、この頃月に幾人となく、ああいう狂人の出て来るのは、変だと云えば変ですなあ」

こう云つたのは総髪物々しく、被布ひふを着た一人の易者であつた。冷雨ひさめがにわか降り出したので、その仕舞家しもたやの軒の下に、五人は雨宿りをしたものと見える。

今も冷雨は降つていた。その冷雨に濡れながら、髪を乱し衣紋を乱した、若い美しい狂人の娘が、田沼家の前を行ったり来たりしていた。

「ね、もう一度ままごとをしようよ」

そう喚く声がここまで聞こえた。が、間もなく姿が消えた。裏門の方へでも行つたのであろう。

パラパラと不意に降つて来て、しばらく経つとスツと上がる。これが冷雨ひさめの常である。

冷雨が上がった。

「へい皆様、ご免くださいつて」

易者が最初にこう声をかけて、軒下から往来へ出た。

「それじゃ私も」

「では拙者も」

などと云いながら五人の者は、つづいて軒下から往来へ出た。そういう様子を少し離れた、これも軒下に佇たたずんで、雨宿りをしていた三十五、六歳の武士が、狙うようにして見守っていたが、

「またあいつら何かをやり出すな」

言葉に出して呟いた。それから首を傾げるようにしたが、

「どうもそれにしてもお篠という女が、あのお方の側室そばめにあがって以来、あのお方のやり方が変になられた。……どつちみちお篠に似た女の狂人きちがいが、こう輩出したのではやり切れない」

(よし、一つ調べてやろう)

その日の夕方のことであったが、神田三崎町三丁目の、指物店山大の店へ、ツトはいっ

て来た侍があつた。雨宿りをしていた侍である。

「主人はいるかな、ちよつと逢いたいが」

「へい、どなた様でいらつしやいますか？」

店にいた小僧が恐る恐る訊いた。

「オチフルイ十二神貝十郎と云うものだ」

主人の嘉助が奥から飛んで来た。

「これはこれはオチフルイ十二神の殿様で。……」

「ああ主人か、訊きたいことがある。この頃『ままごと』がよく出るようだが」

「へい」と嘉助は小鬢を搔いた。

「諸方様からご注文でございますので」

「どんな方々から注文があるか、ひとつそれを聞かしてくれ」

「かしこまりましたでございます」

それから主人は名を上げた。松本伊豆守から五個、赤井越前守から三個、松平正まきすけ允から二個、伊井中将から一個、浜田侍従から一個。……等々であつた。

「なるほど」

と貝十郎は苦笑いをしたが、

「いずれも立派な方々からだな。……ところで松本伊豆守様からが、一番注文が多いようだが、この頃にご注文があつたかな？」

「へい、一月の十五日までに、是非とも一つ納めるようにと、ご用人の三浦作右衛門様から。……」

「二月の十五日、ふうんそうか」

尚二つ三つ訊ねてから、貝十郎は山大を出た。

二

(どうにも今は変な時世だ。物を贈るにも流行がある。以前には岩石菖はやが流行ったつけ) 以前に田沼主殿頭が、病床に伏したことがあつた。病氣見舞いのある大名が、主殿頭の家臣に訊ねた。

「この頃は田沼主殿頭殿には、何をご愛玩でごぞいますかな？」と。

「岩石菖をご愛玩でごぞいます」

するとそれから二、三日が間に、岩石菖の贈物が、大きい座敷二つを埋めて、田沼家へ到来したそうである。

(ところが今では『ままごと』だ。……われもわれもと『ままごと』を贈る)

貝十郎は歩きながら、苦笑せざるを得なかった。

(これも仕方がないのだろう、贈賄わいろという風習はな。……長崎奉行が二千両、御目附が一両と、相場さえ立っているのだからな。……贈った方が得なんだからな。……贈賄をする。役にありつく。今度は自分が収賄をする。贈賄の額よりも十倍も百倍も、多額のものを受賄する。……贈った方が得なんだからな。……それにさ世間のそうした風習に、一人逆らって超然としていると、旧弊というので仲間つ外れにされる。そのあげくに迫害される。そればかりかそのあげくには、あいつばかりがこんな時世に、廉潔を保っているなんて、途方もない売名家だ。逆行して名を売ろうとしているのだ。あいつこそ本当は悪党だと悪党から悪党視されることになる。……だからさ時には岩石菖だの『ままごと』をお贈りした方がよろしい。……もつとも俺には出来ないがな。……出来ない俺には別の処世法がある、踏晦ふみさげして遊蕩に耽けることさ。……どれ水茶屋へでも出かけて行こう) 　　こうして貝十郎は浅草まで来た。

江戸一番の盛り場で、四季に人出が多かった。「あづま」という水茶屋があつて、その前まで歩いて来た時、五十年輩の侍が、暖簾のれんを刎ねて出るのが見られた。顔にあばたがあつて下品であつたが、衣裳や腰の物は高価の物づくめで、裕福の身分を思わせた。

(おやあれは三浦作右衛門だ)

貝十郎はニヤリとした。

(松本殿の用人の、ああいう人までが水茶屋女に、興味を持つようになったのかな。……ああでもないど四畳半！ その四畳半趣味に飽きると、こうでもないど水茶屋の牀几へ、腰を下ろすようなことになる)

こんなことを思いながら、貝十郎は見送つた。と、その時、「あづま」の門へ、姿を現わした女があつた。へへり頤、二重瞼、富士額、豊かな頬、肉厚の高い鼻。……そういう顔をした女であつて、肉感的の存在であつたが、心はそれと反対なのであろう。全体はかえつて精神的であつた。

(ここの娘のお品だな、相いも変わらず美しいものだ)

貝十郎はそう思ったが、

(待てよ！ ふうん、お品の顔！)

で、何やら考え込んだ。そういう貝十郎が見ているとも知らず、お品は何んとなく愁わしそうな様子で、暮れて行く空を仰いでいたが、にわかいきいきに活々と眼を躍らせた。

向こうから一人の若侍が、お品に向かつて笑いかけながら、足を早めて来たからであった。貝十郎は若侍を見た。それからお品の顔を見た。

(そうか)

と思ひあたつたような様子であつた。

(新八郎氏がお品に通う！これはありそうなことだわい)

その若侍とお品とが、もつれるような姿をして、暖簾の奥へ引つ込んだのを見すてて、貝十郎は歩き出した。

思案に耽つている様子であつた。冷雨の降つた後である。盛り場も今日は比較的しに寂しく、それに夕暮れになつていたので、家々では店を片付け出していた。

しかし一ひとところ所に大公孫樹いちじょうがあつて、そこだけには人が集まっていた。居合抜きやの香具し師しの薬売りで、この盛り場の名物になつている、藤兵衛という皮肉な男が、口上を述べているからであつた。

この藤兵衛には特技があつた。彼のお喋しゃべ舌りを聞こうとして、集まって来る人達の中に、

知名の人や名士がいると、早速その人の名を揚げて、その人の癖や特色を、や揄したり褒めたりすることであった。

「大変なお方がお立ち寄りになった。これは大和屋文魚様で！ 蔵前の札差し、十八大通のお一人！ 河東節の名人、文魚本多の創始者、豪勢なお方でございますよ。が、その割においらん花魁にはもてず、そこでかえつて稼業は繁昌、夫婦別れもないという次第！ 結構至極ではありますが、私の薬をお飲みになったら、もてないお方ももてようというもの！ それ精力が増しますのな。……これはこれは平賀源内様で、ようこそお立ち寄りくださいました。が、どうして平賀様には、奥様をお貰いなさいませんので。それにさいたい平賀様には、何が本職でございますかな？ 本草学者か発明家か、それとも山師か蘭学者か？ お医者衆なのでございますかな。……」

——などと云うような類であった。

今も彼は十五、六人の、暇そうな見物に取り巻かれ、きせわ気忙しそうに喋舌っていた。

「近來流行る『ままごと』の中へ、この売薬を一袋、どうでも入れなければ嘘でござんす！ 名に負う蘭人の甲必丹キャピタンから、お上へ献上なされようとして、わざわざ長崎の港から、江戸まで持つて参った薬で！ 人参などは愚かのこと、四目屋の薬など愚かのことで！

利きます利きます非常に利きます！ 一粒飲めば胸もとが躍る、二粒飲めばこめかみに汗、三粒飲めばワクワクする。四粒五粒と飲んで行くうちに、悉しっかい皆我慢が出来なくなる。さう一袋飲んだとする、この世がかの世か、かの世がこの世か、見境いのないことになり、うっちゃつて置けば鼻血が出る。捨てつ放なしにして置けば、……もうこの後は云われない。……やッ」

とにわかには藤兵衛は云つて、一方へ眼を走らせた。それからまたも喋舌り出した。

「ご大層もない人がお立ち寄りなされた！ この節世上にお噂の高い『館林様』がお立ち寄りなされた！ 深編笠、無紋のお羽織、紫柄のお腰の物、黙って道を歩かれても、威厳で人が左右へ除ける！ お供はいつもお一人で……おやいけない、行つておしまいなさる！」

「館林様？ ふうん、そうか」

公孫樹いちようの蔭に佇んでいた、十二神貝十郎オチフルイは呟きながら、右手の方へ眼をやった。

いかさま深い編笠を冠り、黒の衣裳に無紋の羽織、紫の紐で柄を巻いたきやしやな大小を穩かに差し、袴なしの着流しで、塗り下駄を穿いた二十八、九歳の、貴人のように威厳のある武士が三十五、六の大兵の武士を、後に従えて人の群から離れ、町の方へ静かに歩

きつつあつた。

(こういう俗悪の世になると、ああいう神聖な人物も出る。反動的とでも云うのだろうか) 貝十郎はこう思いながら、雀色になつた夕暮れの中に、消え込んで行くその人の姿を、尊いもののように見送つたが、やがて藤兵衛へ近寄つて云つた。

「これ、薬を一袋くれ」

買った薬を懐中し、貝十郎は歩き出した。

(お篠という女が側室そばめに上がった。……お篠という女に似た女が、盛んに変な狂人きちがいになる。……『ままごと』という変わった道具。……松本伊豆守が頻りに使う、……お品という娘がお篠に似ている。……松本伊豆守の用人がお品の店へ出入りする。……一月十五日に『ままごと』が、伊豆守の邸へ届けられる。……新八郎氏がお品の情人いろ。……藤兵衛の売つていたこの薬? ……玄伯老にでも訊ねてみよう)

蘭医杉田玄伯の家へ、貝十郎がはいつて行つたのは、初夜を過ぎた頃であつた。

こういうことがあつてから、幾日か経つたある日のこと、お品の家で、お品と新八郎とが、しめやかな声で話していた。

「お品、私はお前をいとしく思うよ。お前一人だけを。……お前も私をいとしく思つてくれるだろうね。裏切りはしまいね。この私を。……私は女に裏切られた男だ」

新八郎はこういうように云つて、自分の前へつましく坐り、うなだれているお品の額へ、そのきやしやな手をやった。ほつれている髪を上げてやったのである。お品はうなずくばかりであつた。

(わたし妾もほんとにこのお方が好きだ。何の妾が裏切ろう。妾は決して裏切りはしない。でも、ある強い外界からの力が、妾を裏切らせようとしている)

お品にはこれが苦しかった。どう云つて返辞をしてよいか？ それも解らなかつた。額くばかりで黙つている理由はこれであつた。

ふとお品は新八郎へ訊いた。

「お勘定奉行の松本伊豆守様とおっしゃいますお方は、どういうお方なのでございませう」

「厭な奴らしい」

新八郎は吐き出すように云った。

「賄賂取りの名人だ。自分でも随分賄賂を使う。田沼侯へ贈賄して、あれまでの位置になった奴だ。……だがそれがどうかしたかな」

「はい。……いいえ」

と曖昧あいまいに云った。そう曖昧に云つて置いて、お品は愁然とした。

「そのお方のご用人だとかいとお方が……」

「お前を見初めたとでも云うのかな？」

「でも妾はどうありましょうとも。……」

「……………」

この日の午後は晴れていて、この家の裏庭に向いている障子へ、木の枝の影などが映つていた。

その同じ新八郎が、ある夜往来みちで声をかけられた。

「お気の毒なお身の上でございますのね。でも、あの娘ごの罪ではございません。さりとて、松本伊豆守様の罪ばかりとも申されません。元兇は他にあります。……×××町を通

り、△△町を過ぎ、□□町を歩き抜け、○○町まで行き、そこで認めた異形の人数をどこまでもつけていらっしやいまし。自ずとわかるでございましょう」
それは女の声であつた。

(おや?)

と新八郎は驚きながら、声の来た方へ眼をやつた。お高祖頭巾を冠っている。上うわせい身長があつて肥えている。そう云う女が土堀に添つて、一人で立っている姿が見えた。

新八郎は不思議そうに訊いた。

「あなたはどなたでございますか?」

しかし女は答えなかつた。

「お品のことについて云つておられますので?」

「はい。……そうしてもう一人の、お気の毒な女の方についても」

「ああそれではお篠のことについて?」

すると女は頷いて見せた。

「妾をお信じなさりませ。云う通りに実行なさりませ」

(何んと云う眼だ! 何んと云う声だ!)

新八郎はそう思った。

お高祖頭巾の奥の方から、彼を見詰めている彼女の眼が、男のような眼だからであった。声にも著しい特色があった。男の声のように強かった。

（お品のことを知っている。お篠のことを知っている。この女はいったい何者なのであるう？）

（こんな所にこんな晩に、女一人で供も連れず、何んと思つて立っているのか？）

（俺に云いかけたこの女の言葉！ 親切なのか不親切なのか）

新八郎は疑惑を感じながら、立ち去ることも出来ず立っていた。

四

朧おぼろづき月の深夜で、往來ゆききの人はなく、犬の吠え声はずっと遠くの、露路の方から聞こえて来た。お筒持ちの小身の武士達の長屋町なので、道幅なども狭かった。

新八郎の姓は小糸、年は二十八歳で、身分は旗本の次男であり、独身の部屋住みであった。当時少しずつ流行して来た蘭学に興味を持ち、苦心して読みにかかっていた。平賀源

内か、前野良沢かについて学ぼうか、それとも長崎へ行つて、通辞に従い、単語でも覚えようかなどと、そんなことを考えてもいた。

五百石の旗本の倅せがれなので、随分裕福で、わがままであつた。女も好き酒も好き、それと年齢としからも来ているのである。猟奇的の性格の持ち主であつた。戸ヶ崎熊太郎の門下であつて、剣道では上手の域に達してもいた。

毎年長崎から甲必丹キャピタン蘭人が通辞と一緒に江戸へ来て、將軍家に拝謁した。その逗留所を客室と云い、その客室では蘭人が携さえて来た舶来品を並べて諸人に見せた。天気ウエールガラ驗器、寒暖テルモメーター驗器、震雷ドンドルガラス驗器、暗室写真鏡ドンクルカームル、等々——そんなものが陳列された。杉田

玄伯だの桂川甫周だの、中川淳庵だのがよく見に行つた。で、新八郎も見に行つた。そして誰にも負けず好奇心を募つらせた。

歐羅巴ヨーロッパにおける拷問器具——姦通をした女に冠せたという、「驢馬仮面」と十字軍の戦士連が出征に際して、その妻妾の貞操を保護するために、その妻妾連の局部へまとわせたという鉄製の「貞操帯」を見た時変な気がした。狂人のような好奇心に獵り立てられたのである。

「こういう種類の品物、まだまだありましような？」

と大通辞の吉雄幸左衛門へ訊いた。

「さよう、沢山あります。そうして江戸へも持つて来ました。がそれはご懇望によりある方面の貴顕へ献じました」

こう幸左衛門は答えた。

(是非見たいものだ)

新八郎はこう思ったが、誰に献じたのか解らなかつたので、その人を尋ねて見ることは出来なかつた。しかし彼は訊いて見た。

「どなたへご献上なさいましたので？」

「甲必丹キャピタンカランス殿にお訊きなされ」

こう云つて幸左衛門は笑つて取り合わなかつた。甲必丹には容易に逢うことが出来ず、出来ても言葉が解らず話すことが出来なかつたので、新八郎の希望はとげられそうもなかつた。

(惨忍ではあるが何んと誘惑的の器具なのだろうか？ 是非見たいものだ)

新八郎はそう思った。

今もそのことを思いながら歩いているのである。それにしても何故彼はそうした器具に

興味を持ったのであろう？ 彼の愛人であつたお篠という女が彼を裏切つて、ある幕府の権臣の妾になつたことが原因であつた。

(是非あの女に逢つて見たい、逢つてああいふ器具を使用させて見たい)

これが希望のぞみなのであつた。その女は町医者千賀道有の娘で、随分美しい女であつた。二年の間睦むつみ合い、相当の武士の養女として、そこから嫁として新八郎のもとへ来ることに話がきまつてさへいた。

ところが不意に女はいなくなつた。

で、新八郎は道有を責めて、女をどこへやつたかと訊ねた。

「あるお方の側室そばめに差し上げました。しかし、その方の何方であるかは申し上げられませんが。また、申し上げたとしても、貴所にはどうもなりません。御大老伊井中将直幸様さえ頭の上がないお方なのですから」

これが道有の返辞であつた。

女が行つた先が、素晴らしい権臣であることだけは間もなく証明された。町医者であつた道有が、その後恐ろしいような出世をしたのであるから。すなわち侍医法眼となり、浜町に二千坪の屋敷を持つようになったのであるから。

お篠がそういうようになって以来、新八郎は楽しまなかつた。しかるに間もなく水茶屋の娘でお品という女が、お篠と顔立ちが似ているところから、新八郎の心を引くこととなり、新八郎はお品と睦んだ。がどうだろうそのお品も、二、三日前に松本伊豆守へ、用人の手から引き上げられてしまった。小間使いという名義の下に、どうやら妾にされたようであつた。

お篠は派手な性質で、贅沢することが出来るのだつたら、自分から進んで貴顕権門の、妾になるような女であつた。

しかしお品の方はそうではなかつた。こまやかなつましい情緒を持ち、ささやかな欲望に満足し、愛する男を一本気に愛する。——そう云つたような性質の女であつた。

でお篠が自分を見捨てて権門の妾になつたという、そういうことを知つた時、新八郎は憎悪を感じた。

しかしお品が同じ身の上になつたと、お品の母親によつて聞かされた時、新八郎は可哀そうなと思つた。が、どつちみち新八郎の心は、慰めのないものとなつたのである。

そういう新八郎の眼の前に、お高祖頭巾を冠つた女が、今忽然と現われて、謎めいた言葉をかけたのである。

(この女は何者なのであろう? ……どうして俺の身の上や、お品やお篠の身の上について、見通しのようなことを云うのであろう?)

疑惑を持たざるを得なかった。

(もう少し突っ込んで訊いて見よう)

こう新八郎は思い付いて、その女の方へ近寄ろうとした。

と、その女は歩き出した。

「ご婦人」

と新八郎は声をかけた。しかしその時にはもうその女は、その横手に延びている小広い横丁へはいつていた。

「しばらく」

と新八郎も横丁へはいつた。が、すぐに「おや」と云った。女が四人の男達に、前後を守られていたからである。

(そうか)

と新八郎はすぐに思った。

(女は一人ではなかったのだ。以前まえから男達があそここにいて、あの女を警護していたのだ)

(いよいよ不思議な女ではある)

五

女の一団は歩き出した。

(さてこれからどうしたものだ?)

このまま自分の家へ帰るか、それとも女の言葉に従い、×××町などを通り過ぎて、○町まで歩いて行って、そこで逢うことになっている、異形の人数に逢ってみようか?

——新八郎はちよつと迷った。

(いやいやそれよりあの女の素姓と、住居すまいとを突き止めることにしよう)

新八郎の好奇心は、女の方へ向かつて行つた。で、先へ行く女の一団を、新八郎はつけて行つた。

(おや)

としばらく歩いた時に、新八郎は呟いた。×××町へ出ていたからであり、そうして女の一団が、○○町の方へ行くからであつた。

(女が俺を案内して〇〇町まで行くのかもしれない)

新八郎の好奇心は、このためにかえつて倍加された。で、後をつけて行った。

こうしてとうとう〇〇町まで来た。するとそこで新八郎は、次々に変わった出来事と、
そうして変わった人物とに逢つた。

行く手に宏壯な屋敷があつて、藁いらかを月光に光らせていたが、その屋敷の門の前まで行く
と、例の女の一団が、にわかには揃つて足を止め、内の様子を窺うようにした。が、急に引
つ返し、その屋敷の横手に出来ている、露路の中へはいつてしまった。

(いったいどうしたというのだろう)

新八郎は不思議に思つて、その屋敷の方へ小走ろうとした。しかし彼は足を止めて、あ
べこべに物の蔭へ隠れた。

その屋敷の門が開いて、異様の行列が出たからである。二人の侍が最初に出、つづいて
四人の侍が出た。その四人の侍が、長方形の箱を担かついでいる。と、その後から二人の侍が、
一挺の厳いかめしい駕籠に付き添い、警護するように現われた。

これだけでは異様とは云えまい。

しかるにその後から蒔絵を施した、善美を尽くしたお勝手だんす箆すが、これも四人の武士に

担がれ、門から外へ出たのである。

異様な行列と云わざるを得まい。がもし新八郎が近寄って行って、先に出た長方形の箱を見たなら、一層に異様に思ったことであろう。

その箱が桐で出来ていて、金水引きがかかっている、巨大な熨斗のしが張りつけられてあり、献上という文字が書かれてあるのであるから。

行列は無言で進んで行った。

半町あまりも行き過ぎたであろうか、その時露路に隠れていた、例の一団が、往来へ姿を現わして、その行列をつけ出した。

しかし行列の人達に、目付けられるのを憚るかのようになり、家々が月光を遮って、陰をなしているという陰を選んで、きわめてひそやかにつけて行った。

新八郎の好奇心は、いよいよたかぶらざるを得なかった。でこれも後をつけた。例の屋敷の前まで行った時、それが松本伊豆守の別邸であることに感付いた。

「ふうん」

と何がなしに新八郎は呻いた。不安と憎悪と敵愾てきがいしん心とが、ひとつになったものを感じたからである。

(駕籠の中に伊豆守はいるのかな？ 箱の中には何があるのかな？ そうしてあの箆笥の中には？)

(こんな深夜にどこへ行くのか？)

疑惑が疑惑を次々に生んだ。と、その時新八郎は、背後から含み声で声をかけられた。

「小糸氏、お遊びのお帰りかな」

驚いて新八郎は振り返って見た。三人の武士が背後にいる。

六

一人は彼と顔見知りの、オチフルイ十二神貝十郎という与力であり、後の二人は知らなかったが、どうやら風俗や態度から見て、貝十郎の輩下にあたる、同心のように思われる。

「や、これはオチフルイ十二神氏か」

新八郎はテレたように云った。声をかけたのは貝十郎であった。

「遊ぶもよろしいが程々になされ」貝十郎は愉快そうに云った。「随分お噂が高うござるぞ。何んにしてもこのような寒い季節に、ブラリブラリとこのような深夜に、お歩きなさ

るのは考えもので。第一あのような変な物に逢います。『ままごと』や『献上箱』というような物に。……まあ、これもご時世とあればああいうものの跋扈はつこするのも、仕方ないとは云われましようがな。全く変なご時世でござる。流行唄はやりなどにもうたわれております。

『よにあうは、道楽者に驕おごり者、転び芸者に山師運上』

『世の中は、諸事ごもつともありがたい、ご前、ご機嫌、さて恐れ入る』

『世の中は、ご無事、ご堅固、致し候、つくばいように拙者その元』

『世にあおう、武芸学門、ご番衆、ただ奉公に律義なる人』……アツハツハツ、変なご時世で。……いや拙者などはその一人で、世にあわぬ者のその一人で、そこで拙者も歌を作つてござる。

『世にあわぬ、与力同心門の犬、権門衆の賄賂番人』……とは云えこれも考えようで、面白いと見れば面白うござる。

『滄浪の水清まばもつて吾が纓えいを濯あらうべく、滄浪の水濁らばもつて吾が足を濯あらうべし』……融通無碍むげになりさえすれば、物事かえつて面白うござる』

(それ始まったぞ、始まったぞ)

新八郎は苦笑と共に、こう思わざるを得なかつた。

(お喋舌り貝十郎が始まったぞ)

後世までも オチフルイ 十二神貝十郎は、宝曆から明和安永へかけての名与力として謳うたわれて、曲淵甲斐守や依田和泉守や牧野大隅守というような、高名の幾人かの町奉行から「部下」として力にされたばかりでなく、「賓客」ないしは「友人」として尊敬されたほどであった。それに彼は学者であった、とは云え天保年間の、大塩中斎というような、ああいう厳いめしい陽明学者ではなく、いうところの軟文学者——いうところの俗学者であった。でその方面の友人には、蜀山人だの宿屋飯盛だの、山東京伝だの式亭三馬だのそう云ったような人達があり、また当時の十八大通、大口屋暁翁だの大和屋文魚だの桂川甫周だのというような、そういう人達とも交際があった。

後世田沼主殿頭が、まことにみじめに失脚した時、それを諷した阿呆陀羅経が作られ、一時人口に膾かい炙ししたが、それを作ったのが貝十郎であると、当時ひそかに噂された。

そもそもわつちが在所は、遠州相良の城にて、七ツ星から、軽薄ばかりで、御側へつん出て、御用をきくやら、老中に成るやら、それから聞きねえ、大名役人役人役替えさせやす。なんのかのとて、いろいろ名をつけ、むしように家中の者まで、分限になりやす。あんまりわつちも嬉しまぎれに、とてもものついでに、大老なんぞと、これからそろそろむ

ほんと出かけて、出入りの按摩を取り立て、お医者としらえ、玉川上水、印旛の新田、吉野の金掘り、む性に上納、御益のおための、なんのかのとて、さまざま名をつけ、おごつてみたれば、天の憎しみ、今こそ現われ、てんてこ舞いやら。ヤレまたまたむすこは切られて、孫はくわるる。印旛の水から、関東へ押し出し、新田どころか、五年が間は、皆無になりやす。やれやれ、それから取り立て医者めが、薬が異つて、因果とわつちが落度となりやす。御役ははなれて女の老中に、めつたに叱られ、これまでいろいろ瞞だまして取つたる五万七千、名ばかり名ばかり、七十づらして、こんなつまらぬことこそあるまい。ほんとに今年は、天時つきたる。悲しいことだにほういほうい。

——これが彼の作つた阿呆陀羅經なのである。辛辣、諷刺、事情通、縦横の文藻、嘲世的態度、とうてい搔かい撫なでの市井人が、いいかげんに作つたものでないことは、おおよそ見当がつくことと思う。殊に一代の名臣ではあつたが、その消極的政策と緊縮、節約主義とによつて、浮世を暮らしにくく窮屈にした、白河樂翁こと事松平越中守を「女の老中」と喝破したあたりは、彼でなければ出来なかつたことで、そうしてこういう点から推して、彼がこの時代の反抗児であり、不平児であつたということが、充分推察することが出来る。事実彼はそういう人物であつた。そのため彼は後年において、幕府の有司から睨まれて、

お役ご免になつたばかりでなく、かなり身上を迫害された。そこで彼は江戸を去り、京都西山に閑居したが、所司代から圧迫されたので、名古屋へ移つて住むことになつたが、武士であつては都合が悪いと云うので、とうとう大小をすててしまひ、大須観音の盛り場の——今日いうところの門前町へ、袋物の店を出し、商人として世を終つた。

(その屋号を『かみ屋』と云い、今日も子孫が残つていて、同じ門前町に営業している) 彼が与力であつた頃の、風俗というのが粹で渋く、次のようなものだったといふことである。

額は三分ほど抜き上げ、刷毛先細い本多鬚、羽織は長く、紐は黒竹打ち、小袖は無垢で袖口は細い、ゆきも長く紋は細輪、そうして襦袢は五分長のこと、下着は白糸まじりの黒八丈、中着は新形の小紋類、そうして下駄は黒塗りの足駄、大小は極上の鮫鞆さめざやで、柄に少し穢よじれめをつける、はな紙は利久であつた。こういう風俗で十八大通や、蜀山人などと連れ立つて、吉原などへ行つたものらしい。

「饒舌じょうぜつにしてわづらわし」——彼についてこう云われている。

「油坊主」「蟬時雨せみしぐれ」——などというような綽名あだなさえ、彼にはあつたといふことであるが、しかし彼の饒舌じょうぜつは、もちろん天性にもあつたらうけれども職掌からも来ているら

しかつた。と云うのはノベツに能弁に、不得要領のことや洒落しやれや皮肉や、警句などを連発している間に、容疑者の態度や顔色や、心理の変化を観察したからで、この饒舌が著しく、職業に役立つたということである。

貝十郎がそのお喋舌りを、新八郎に向かつてやり出したのである。

（それ始まつたぞ始まつたぞ）と、新八郎が苦笑したのは、当然なことと云わざるを得まい。

「とはいえ今日は一月の十五日、貴殿がここへおいでなされて、あの異様な行列をつけて行かれるのは当然とも云えます。が、拙者は、不思議なので。どうしてああいう行列が、今夜あのように練つて行くか、お知りなされたかが、不思議なので。探つてお知りなされたかな？ それとも恋の念力から……」

貝十郎は云いつづけて来たが、その間も新八郎の顔を見たり、新八郎の顔を無視し、行列を眼で追つたりした。

が、俄然として貝十郎は叫んだ。

「ソレ、方々！ おやりなされ！」

同時に喚く声や叱咤する声や、太刀打ちの音が行く手から起こり、新八郎の横手を擦り

抜け、二人の同心が矢のように、走って行くのが見てとれた。

「新八郎氏、ついでござれ」

こう云った時には貝十郎も、行列の方へ走っていた。

つづいて走り出した新八郎の眼には、朧月の下の往来で、例の女の一団と、例の行列の人数とが、切り合っている姿が見えた。

七

新八郎の行きつかない前に、これだけの事件が起こっていた。

まず女の一団が、にわかに刀を抜き揃え、行列の人数へ切り込むや、お勝手箆筒を担いでいた侍と、献上箱を担いでいた侍とが、お勝手箆筒や献上箱を捨てて、これも刀を抜き揃えて、女の一団と切り結んだ。

しかし女の一団の、鋭い太刀風に切り立てられ、二、三間後へ退いた。と、見てとった女の一団は、侍達を追おうとはしないで、お勝手箆筒と献上箱とを、六人で担いで側に延びていた、横町の中へ走り込んだ。が、しかし侍達も、うっちゃって置こうとはしなかつ

た。同じ横町へ走り込んだ。そうして取り返した二種の品物を、本通りへ持つて来た。

と、女の一団達は、横町から走り出て来て、侍達へ切つてかかった。こうして乱闘が行われた。

新八郎は走つて行つた。しかし新八郎が行きついた時には、行列の人数と女の一団とは、別々の道を辿つていた。新八郎の行きつく少し前に、側の露路から二人の侍が現われ、その中の一人が鋭い声で、例の女の一団に向かい、叱りつけるように声をかけると、女の一団は驚いたように、行列の人数に切つてかかるのを止め、例の横町の方角へ逃げ、行列の人数はそれを幸いに、行列を急がせて先へ進んだからである。

ところが十二神オチフルイ貝十郎であるが、その頃その場へ駆けつけていたが、そう声をかけた侍の姿を見ると、一緒に走つていた二人の同心へ、

「よし！ 止めろ！ 手を出すな！」

と叫び、これも例の横町の中へ、同心と一緒に走り込んだ。

がしかし新八郎が貝十郎の後から、貝十郎の後をつけて行つたなら、

「やあこれはどうしたのだ!? 献上箱と『ままごと』とを、向こうへも担いで行く者があ
る！ ご両所、あれを……」

とこう云つてから、二人の同心へ小さい声で何やら囁いたことを見聞きしたことであろう。しかし後からつけて行かなかつた、小糸新八郎にはそのようなことを、見聞きするとは出来なかつた。その後はどうなつたか？

行列の人数がずっと先を、今は安心したものと見えて、ゆつくりした足どりで歩いて行き、その後から二人の侍が行き——その一人は声をかけた侍であり、もう一人はその侍の家来らしかつたが——その後から小糸新八郎が、疑惑の解けない心持ちで、歩いて行くという結果になつた。

次から次と起こつて来る変わった事件に、新八郎の心は、解けない疑惑に充たされていたが、それよりも眼前を歩いて行く、二人の侍の中の一人——声をかけた侍に引きつけられていた。深編笠、無紋の羽織、袴なしの着流しで、きやしやな大小を穩かに差し、塗り下駄を穿いた二十八、九歳の侍で、貴人のような威厳があつた。それは評判の「館林様」であつた。

ところで新八郎はその人の評判を、以前から聞いてはいたけれど、姿を見たことは一度もなかつた。で、今、館林様が歩いていても、そうだということとは知らなかつた。

(一言二言鋭い口調で、叱るように何か云つたかと思うと、争鬪をしていた二組の者や、

有名なオチフルイ十二神氏というような人まで、その言葉に驚いて逃げてしまった。よほど偉大な人物でなければならぬ)

いったいどういう人物なのであろう？ この疑問が新八郎をして、その人の後をつけさせることにした。

「殿」とその時家来らしい侍が、館林様へそういうように云った。「お止めにならなかつた方がよろしゅうございましたのに」

「いや」と館林様はすぐに云った。「もうあれはあれでよかつたのだ」

「ははあさようでございましたか」

「伊豆は第二の人物で、やつつける必要はないのだからな」

「それはさようでございましょうとも」

「元兇の方をかたづけなければ嘘だ」

「それはさようでございましょうとも」

「私のお父上のご生存中は、田沼という男も今日のように、ああもせんじょう僭せんじょう上な真似はしなかつた」

「それはさようでございましょうとも。殿のお父上右近将監様は、御老中におわすこと三十八年、その間にご加増をお受け遊ばしたこと、わずか六千石でございました。いかにご忠正でございまして、お身をお守り遊ばすことが、お固すぎるほどお固うございましたことか」

「將軍家が田沼をうえさまご寵愛のあまり、度々ご加増遊ばされたが、ある時のご加増に田沼ははばか憚り、私のお父上に意見を訊いたそうだ。するとお父上は云われたそうだ。『そなたの秩はちつまだ五万石以下だ。五万石まではよろしかろう。と云うのは徳廟『吉宗』公様が、秩五万に充たざる者は、積勞によつて増すべきであると、こう仰せ遊ばされたからだ。……今、將軍家うえさまよりの命があつて、そなたがご辞退致したとあれば、一つには將軍家へ不恭となり、二つには將軍家の過贈の非を、世間へ知らせることになる。だからご加増は受けるがよろしい』と。……その時田沼は感激して、涙を流したということだ。……それなのに私のお父上が、この世を辞してからというものは、千恣し百怠たい沙汰の限りの態だ。売官売勲利権漁り、利慾を喰わしては党を作り、威嚇を行つては異党を攻め、自己を非議する識者や学徒の、言説を封じ刊行物を禁じ、美女を蓄わえておのれ己樂しみ、美女を進めて將軍家を眩まし、

奢侈と軟弱と贈収賄と、好色の風潮ばかりを瀾漫させておる。……老中、若年寄、大目附、内閣は組織されていても、田沼一人に掣肘されて、政治の実は行われていない。……こういう時世には私のような男が、一人ぐらい出る必要がある。お父上が老練と家柄と、穩健と徳望とを基にして、老中筆頭という高官にあつて、田沼の横暴を抑えたのを、私は年若と無位無官と、過激と権謀術数と、ある意味における暴力とを基とし、表面には立たず裏面にいて田沼の横暴を膺懲するのだ。……私のような人間も必要だ」

「必要の段ではございません。大いに必要でございます。でありますから世間では、殿様のことをいつとはなしに『館林様』とこのように申して、恐ろしい、神のような、救世主のような、そういう人物に空想し、尊び敬い懐しんでおります。……がしかし殿にはどう遊ばしますのです？　これからどこへいらされますのです？」

「もう用事は済んだのだ。……証拠を捉えようと企んだ仕事は、今、成功したのだからな。で家へ帰つてもいいのだ。がしかし私は笑つてやりたい。で、もう少し行くことにしよう」

「あの行列の後をつけて？」

「そう、行列の後をつけて。そうしてその上であの行列が、あそこの門を何も知らずに、得意にくぐつてはいるのを見て、大声で笑つてやりたいのだ」

「殿らしいご趣味でございます」

「趣味といえども六人男の連中、あくど過ぎて少しく困る」

「根が不頼漢でございますから」

「云い換えると好人物だからさ」

「無頼漢が好人物で？」

「こんな時世に命を惜しまず、感激をもって事を行う！ 気の毒なほどの好人物だよ。：

：仕事を成功させてからも、伊豆守を討つて取ろうとして、横町から本通りへ引つ返して来て、再度の切り込みをしたことなどは、好人物の手本だよ」

「仕事と仰せられ、成功と仰せられる、どのような仕事なのでございますか？」

「家へ帰つてから話してあげよう」

（ふうん、あのお方が『館林様』なのか？ 館林様のご本体は、では甲斐の国館林の領主、

松平右近将監武元卿——従四位下ノ侍従六万千石の主、遠い將軍家のご連枝の一人、三十八年間も執政をなされた、その右近将監武元卿の公達、妾腹のご次男でおわすところから、本家へはいらす無位無官をもつて任じ、遊侠の徒と交われ、本家では鼻つまみだと云われている。松平冬次郎様であられたのか）

後からつけながら二人の話を、洩れ聞いた小糸新八郎は、そう知って驚かざるを得なかった。

(そういう人物でおわすなら、たった一言二言で、あれだけの争鬪をお止めなされた筈だ)
 松平冬次郎の事蹟については、今日相当に知られている。すなわち天明八年の頃、上州武州の百姓が、三千人あまり集まって、五十三カ村を鳩きゆうごう合ごうして、絹糸改役所という、運上取り立ての悪施政所の、撤廃一揆を起こした事があつたが、裏面にあつて指揮をした者が、この松平冬次郎であつた。明和元年十一月の末に、上州、武州、秩父、熊谷等の、これも百姓数千人が、日光東照宮法会のため、一村について六両二分ずつの、臨時税を課するといふ誅ちゆうきゆう求きゆうを怒つて、数カ月にわたつて暴動を起こしたが、この時の蔭の主謀者も、松平冬次郎その人であつた。天明七年五月に起こり、関西から関東に波及して、天下の人心を騒がせた、米騒動ぶちこわし事件！ その事件の主謀者も、彼であつたといふことである。

ところで田沼時代には、天変地妖引きつづいて起こつた。その一つは本郷の丸山から出て、長さ六里、広さ二里、江戸の大半を焼き払つた火事、その二は浅間山の大爆發、その三は東海道、九州、奥羽に、連発した早ひでりや大暴風雨や洪水、数万の人民はそれがために死

に饑え苦しみ流離したが、そういう場合に施米をしたり、人心を鼓舞したり富豪を説いたりして、特別の救助をさせた者があつたが、彼であつたということである。

で、一種風変わりの社会政策実行者としては、この、松平冬次郎は、日本裏面史の大立者なのであつた。

そういう松平冬次郎の「館林様」が供の侍を連れて、今歩いて行くのである。以前にも増して小糸新八郎が、興味と尊敬とに誘われて、後をどこまでもつけて行ったのは、当然のことと云わなければなるまい。早春の深夜の朧月が、江戸の家々と往来と、木立と庭園と掘割と、掘割の船とを照らしている。

九

ここの往来も月光を受けて、紗のような微光に化粧されている。そうして靄もやが立っている。

ずっと向こうを例の行列が、その月光と靄とを分けて、ずんずん先へ進んで行く。その後から館林様と家来とが、話し合いながら進んで行く。それを新八郎はつけて行った。

館林様の上品端正な、両の肩が月の光を浴びて、仄かに銀のほのように白っぽくおぼめき、肩の上に山形に載っている、編笠があたかも異様に大きい、一片の花の弁のように見えた。こうして町々を通り抜けた。

と、行く手に余りにも宏壮な、大名の下屋敷が立っていた。

その裏門まで行った時である。例の行列が開いた扉から、呑まれるように吸い込まれた。で、後は静かとなつて、人の姿は見られなかった。しかしその時その門の前で、大きく笑う笑声がした。

見れば館林様とその家来とが、門の前に立っていた。が、やがて引返して来た。そうして木蔭に身を隠していた、新八郎の横手を抜けて、元来た方へ帰って行った。

(稲荷堀の田沼侯の屋敷の前で、館林様には大笑なされた。あのお方の目的はとげられたという訳さ。……何故笑ったか知らないが、笑っただけでも痛快だ)

新八郎はこう思いながら、木蔭から姿を現わした。

(ところで俺はこれからどうしたものだ?)

家へ帰るより仕方がなかった。

(いろいろと変わった人間に逢い、いろいろ変わった事件に逢った。無駄な一夜だったと

は云われない)

彼は満足した心持ちで、元来た方へ引つ返そうとした。しかしその時木立の蔭から、こう云う声が聞こえて来たので、引つ返すことは出来なかった。

「中へはいつてごらんなされ。さよう、田沼侯のお屋敷の中へ！　せめてお屋敷の庭へなりと。……貴殿がおはいりになられるようなら、拙者ご案内をいたすでござろう」

オチフルイ

十二神貝十郎の声であった。

「十二神氏、そこにおられたのか」新八郎はテレたように云った。「田沼侯のお屋敷へはいれと云われる、何んの必要がありましたかな？」

「『ままごと』の中に何があるか、献上箱の中に何があるか、貴殿お知りになりたくはないので？」尚も木蔭から貝十郎は云った。「貴殿の恋人お品殿が、松本伊豆守に引き上げられた。その松本伊豆守が、献上箱と『ままごと』とを仕立てて、たった今田沼侯の屋敷へはいった。二品は賄^{まい}賂^{ない}の品物でござる。ところで、世上にはこう云う噂がござる。人形と称して生きた美女を献上箱の中へ入れ、好色の顯門へ納^いれるという噂が。……」

「それでは今の献上箱の中に。……」

「お品殿がはいっておられようも知れぬ」

「行こう！」

「行かれるか？」

「屋敷の中へはいろいろ！」

「ご案内しましょう。おいでなされ」

老中田沼侯の下屋敷の庭へ、外から忍んで入るといふようなことは、考えにも及ばない不可能事のように、今日では想像されるけれど、あながちそうでもないものであつて、鼠小僧といふような賊は、田沼以上の大大名、細川侯の下屋敷の、奥方のおられる寢所へさえ、忍び込んだことさえあるのであつた。

貝十郎は風変わりの、しかも素晴らしい技倆を持った、聡明で敏捷な与力であつた。田沼家の案内など、知っているのであろう。新八郎の先に立って、木立を抜けて先へ進んだが、やがて田沼家の横手へ出た。ひときわ木立が繁つていて、その繁みに沿いながら、田沼家の土塀が立っていた。

「この辺最も手薄でござんす」

こう囁くと貝十郎は、立ち木の一本へ手をかけて、足で土塀を蹴るようにした。と、彼の姿はもうその時には、土塀の上に立っていた。そうしてその次の瞬間には、土塀から邸

内へ飛び下りていた。新八郎も同じようにして、田沼家の邸内へ飛び下りた。

十

大名の下屋敷の庭の構造などは、大概似たようなものであって、泉水、築山、廻廊、亭、植え込み、石灯籠、幾棟かの建物——などというようなありきたりのものを、小堀流とか遠州流とか、そういった流儀に倣めて、縦横に造つたものに過ぎないのである。

二人の眼の先にあるものは、やはりそういうものであった。

「ともかくも向こうへ行つて見ましよう」

貝十郎は前に立つて、植え込みをくぐつて先へ進んだ。築山の裾を右へ廻り、泉水にかけてある石橋を渡り、綿のように白く咲いて見える満開の梅の林の横を、右手の方へ潜行した。と、正面に廻廊をもつて繋いだ、主屋と独立した建物があつた。

「この建物が大変な物なので」貝十郎は指さしながら、なかば憎さげになかば嘲笑うように、

「云つて見れば閨房なので。同時に拷問室でもあれば、ギヤマン室までありますので。」

田沼侯お気に入り、平賀源内氏が、奇才を働かせて作った室の由で。四方の壁から天井から、ギヤマンの鏡で出来ているそうで。……いったい田沼という仁^{じん}は、変態的の人間でしてな、秘密と公然とを一緒にしたものを、万事に好まれるということでござる。秘密であるべき賄賂というようなものを、ソレ公然とお取りになる。公然であるべき政治というようなものを、わけても人事行政などを、私的情^{じょうぎ}誼^ぎ的におやりになる。……色情の方もそれと同じに、秘密にすべきを公然とするということでござる。……ええと、ところで今夜の犠牲者の中には、貴殿の恋人のお品殿が。……」

にわかには貝十郎は黙ってしまった。殺気と云おうか、剣気と云おうか、そう云ったものを感じたからである。彼は新八郎の顔を見た。先刻から無言で終始していた新八郎は今も無言で、貝十郎の左側に立っていたが、木洩れの月光に胸と顔とを、薄い紙のように白めかしていた。顔の表情の狂気じみていることは！二倍に見開かれた大きな眼は、その建物を見据えている。小鼻から口の側^{わき}へかけて、引かれている皺^{しわ}は紐のように太い！歯を食いしばっている証拠である。

（これはいけない、喋りすぎたようだ。どうも挑発しすぎたようだ。何をやり出すかわからないぞ！）

貝十郎はしまったと思つた。

「新八郎氏、向こうへ行きましょう」

なだめるように声をかけた。新八郎は動かなかつた。鏢つばざわ際を握つた左の手が、ガタガタ顫ふるえているらしい。刀の鐙こじりが上下して見える。

「新八郎氏、向こうへ向こうへ」

再度貝十郎が声をかけた時、飛び石づたいに歩きながら、話して来るらしい二人の侍の、話し声がこつちへ近寄つて来た。主屋と離れて別棟があり、諸侍達の詰め所らしかつたが、そこから小姓らしい二人の侍の、手に何やら持ちながら、二人の方へ歩いて来た。

「殺生な奴はこの道具でござる。この貞操帯という奴で」こう云いながら一人の侍は、手に持つていた長方形の木箱を、ひよいと頭上へ捧げるようにした。

「女が発狂する筈でござる」

「この驢馬仮面に至つては、いっそう殺生な器具でござる」もう一人の侍がそういうように云つて、四角の木箱を胸の辺で揺すつた。

「これでは女が発狂する筈で」

「我々の役目も厭な役目で」前の侍がさらに云つた。「着けたり冠せたりしなければなら

ない」

「お品という女、美しいそうで」

「が、明日は狂女となつて、醜くなつてしまいましたよ」

云い云い二人の小姓らしい侍は、廻廊の方へ歩いて行つた。が、蘇鉄の大株があり、それが月光を遮つている、そういう地点までやつて来た時、突然ワツという声を上げ、一人の侍が地に仆れた。

「これどうなされた？ 粗忽千万な」

後の侍が驚きながら、仆れて動かない同僚の側へ、腰をかがめて立ち止まつた。

と、その侍もウーンと唸つて、持っていた四角の木箱を落とすと、両手を宙へ伸ばしたが、そのまま仆れて動かなくなつた。と、蘇鉄の株の蔭から、抜き身をひっさげた新八郎が、スルスルと現われて二人の横へ立つた。

「小糸氏、お切りなされたので？」

蘇鉄の蔭から貝十郎が訊いた。

「峯打ちに急所をひつ叩いたまででござる」云い云い新八郎は抜き身を鞘に納め、二つの木箱を地上から拾つた。

「これから何んとなされるお気かな？」

貝十郎が不安そうに訊いた。

「可哀そうなお品を助け出すつもりで」

「ギヤマン室へ忍び込んでかな？」

「場合によっては切り込んで！」

十一

この頃三人の男女の者が、主屋おもやから廻廊の方へ歩いていった。

「伊豆殿、私わしはこう思うので、音物いんもつは政治の活力だとな」こう云つたのは六十年輩の、長身、瘦軀そうく、童顔をした、威厳もあるが卑しさもあり、貫禄もあるが軽薄さもある、変に矛盾した風貌態度を持った、気味のよくない侍であった。主人田沼主殿頭なのである。

「私はな、日々登城して、国家のために苦勞いたし、一刻として安き時はござらぬ。ただ退朝して我が家へ帰った時、邸の長廊下を埋めるようにして、諸家から届けられた音物類が、おびただしく積まれてあるのを見て、はじめて心の安きを覚え、働こうという勇氣が

起こりましてござるよ」

「ごもつとも様に存じます」こう合榎を打ったのは、後からついて来た四十年輩の侍で、眉細く口大きく、頬骨の立つた狡猾らしい顔と、頑丈な体とを持っていた。他ならぬ松本伊豆守なのである。「音物いんもつはお贈りする人の心の、誠の現われでございますれば、眺めて快く受けて楽しいよろしきものにございます」

「金銀財宝というものは、人々命にも代えがたいほどに、大切にいたすものではござるが、それらの物を贈つてまでも、ご奉公いたしたいという志は、お上に忠と申すもの、褒むべき儀にございますよ」

「御意ごい、ごもつとも存じます。志の厚薄は、音物の額と比例いたすよう、考えられますてございます」

「彦根中将殿は寛濶でござって、眼ざましい物を贈つてくださった。九尺四方もあつたであらうか、そういう石の台の上へ、山家の秋景色を作ったもので、去年の中秋観月の夜に、私の所へまで届けられたが、山家の屋根は小判で葺いてあり、窓や戸ぼそや、板壁などは、金銀幣をもって装おつてあり、庭上の小石は豆銀であり、青茅数株をあしらった裾に、伏させてあつたほうぼうは、活きた慣らした本物でござつたよ」

「その際私もささやかな物を、お眼にかけました筈にございます」

「覚えておる、覚えておる」主殿頭は笑いながら、いそがしそうに頷いた。「小さな青竹の籃の中へ、大鱧おおきす七ツか八ツを入れ、少し野菜をあしらって、それに青柚子ゆず一個を付け、その柚子に小刀を突きさしたものであった」

「その小刀と申しますのが……」

「存じておる、存じておる、柄に後藤の彫刻の、萩や芒をちりばめた、稀代の名作であった筈だ」

薄縁うすべりの敷かれた長廊下には、現在諸家から持ち運ばれた無数の音物が並べられてあった。屏風類、書画類、器類、織物類、太刀類、印籠類、等々の音物であった。そういう音物を照らしているのは、二人の先に立って歩いている、女の持っている雪洞ほんぼりの火であった。紅裏を取り、表は白綸子しろりんす、紅梅、水仙の刺繡ぬいとりをした打ち掛けをまとったその下から、緋縮緬ひぢりめんに白梅の刺繡をした裏紅絹の上着を着せ、浅黄縮緬に雨竜の刺繡の幅広高結びの帯を見せた、眼ざめるばかりに妖艶な、二十歳ばかりの女であつて、主殿頭の無二の寵妾、それはお篠の方であつた。唇が蜂蜜でも塗つたように、ねばっこく艶々と濡れ光っている。紅で染めた紅い唇であつて、淫蕩いんとうの異常さを示していた。

「さあ参ろうではございませぬか、妾と同じ顔をした、お品様がお待ちかねでございます」
お篠の方はこう云ったが、その声には惨忍な響きがあった。

十二

「お篠、お前には退治られたよ。お前にかかるわしと私というものは、まるつきりわし私でなくなつてしまふ」

主殿頭はこう云い云い、廊下をゆるやかに先へ進んだ。

「いいえそうではございません」お篠の方は遮るように云った。「妾と全くわたくし同一嗜好を、おなじこのみ殿様にはお持ちなされて、そこへ妾が参りましたので、それがお互いに強くなつて、今日に及んだのでございます」

「それにしても伊豆殿へはお礼を云つてよい。次から次とお篠に似た女を、目付けて連れて来てくださるのでな」

「お品と申す今夜の女は、わけてもお篠の方に似ておられます」松本伊豆守は得意そうに云つた。「ご満足なさるでございましょう」

「ままごとというこの遊びを、私に教えてくださったのも伊豆殿お前様であつた筈だ」
「献上箱へ活きた犠牲にえを入れ、殿へ音物としてお送りしましたのも、私が最初かと存ぜられ
れませす」

「さようさようお前様だ」

「抽斗ひきだしを引く、皿小鉢が出る。戸棚をあける、ご馳走が出る。抽斗を引く、盃が出る。

戸棚をあける、酒が出る。……蒔絵を施した美しい、お勝手箆筒のあの『ままごと』！

酒盛りをひらくにすぐ間に合う、あの『ままごと』を妾わたしは好きだ！ 『ままごと』をひら

いてお酒盛りをする！ それから献上箱の蓋ふたをあける！ と、人形こけしのよそおいをした、初う

心ぶの未通女おぼこの女が出る。引つ張り出して酌しやくをさせる。それから？ それから？ それから

？ それから？ ……もう『ままごと』も献上箱も、運ばれている筈でございます！ 早

く行くこうではございませんか！ 行ってままごとをいたしましょうよ！」

うわ言のように云いながら、お篠の方は先へ進んだ。やがて三人は主屋おもやを抜け、ギヤマ

ン室をつないでいる、長い廻廊へ現われた。やがて三人は見えなくなつた。

ギヤマン室へはいったのである。

「小糸氏さあさあ遠慮はいらない、ここでゆつくりお品殿と、ままごとをしてお遊びなされ、拙者お相伴いたしましょう」

ここは神田神保町の、オチフルイ十二神貝十郎の邸であった。同じ夜の明け近い一時である。献上箱の蓋があいていたが、その中は空虚になっていた。その代り献上箱の横の方に、そうして小糸新八郎の、端坐している膝の脇に、京人形のよそいをした、お品が青褪めて坐っていた。

二人の前に貝十郎がいた。

その貝十郎の傍には、お勝手箆笥の『ままごと』が、ひきだし抽斗も戸棚もあけられた姿で、灯火に映えて置かれてあった。そこから取り出された酒や馳走類が、皿や小鉢や徳利に入られて、三人の前に置かれてあった。

「実は松本伊豆守殿が、今日、一月十五日までに『ままごと』を一個納めるようにと、指物店山大へ命じたということと、お品殿が田沼侯の側室そばめにあたる、お篠の方によく似ていて、そのお品殿が伊豆守によつて、引き上げられたということとを、前者は拙者自分で調

べ、後者は人伝てに聞きましたので、これは一月の十五日に伊豆守が田沼侯へ音物として、『ままごと』に添えてお品殿を、お贈りするのだと推察し、奪い返すことは出来ないまでも、確かめて見ようとこう思い、今宵伊豆守の邸の傍ほとりへ、忍んで様子を窺っていたのでござる。……ところがその果てがああの通りとなり、拙者も悉ことごとく胆を潰してござるよ。……それにしてもどうして館林様が、今夜の出来事を同じく察し、似たような『ままごと』と献上箱とを作り、どさくさまぎれに伊豆守のそれと、すり換えたのか合点が行きませぬ。が、合点は行きませんでした、もう一組の『ままごと』と献上箱とが、横町を走って行くのを見た時、館林様が策略をもって、伊豆守の『ままごと』と献上箱とを、すり換えて奪って持つて行くのだと、そこは拙者も職掌柄で、直覺的に知りましたので、二人の同心に云いつけて、途中からそれらの二品を、拙者の邸へ運ばせるよう、取り計らわせたという次第でござる。……それはそれとして館林様の仕立てた、『ままごと』や献上箱にはどのような物が、入れられてあるのでございませうか。ちよつと見たいように思われますよ。実はそいつを見たいがために、拙者わざわざ貴殿の後から、田沼侯の邸へ行つたのでござるが、貴殿がほとんど死を決した様で、田沼侯の邸へ無鉄砲至極にも、切り込みをなさろうとなさるので、ようやくここまでお連れした次第。……敵の兵糧で味方が肥える。さあ

さああいつらの『ままごと』の中の、ご馳走で我々飲食しましょう。……ソレここに……もござる。構うことはない酒に混ぜて召され。その上で……をな、ハツハツハツ、お尽くしなされよ。お品殿はやつれて青褪めておられる。恢復なされ恢復なされ！」

十四

この頃京橋の、館林様の邸内の、奥まった部屋で館林様は、女勘助や神道徳次郎や、紫紐丹左衛門や鼠小僧外伝や、火柱夜又丸や稲葉小僧新助などと、酒宴をしながら話していた。

「やくぎな奴らでございますよ。私の手下ながらあの奴らは！」女の姿をした女勘助が、謝るようにそんなように云った。「同心めいた二人の侍が、後からあわただしく追っかけて来て、館林のお殿様が仰せられた、『ままごと』と献上箱とは神田神保町の、オチフルイ十二神貝十郎の邸まで、予定を変えて運んで行くように、と、こう私達に、云いましたので、そこで私達はその通りにしました。と手下あいつら云うじゃアございませんか、……ところがお殿様に承われば、そんなご命令はなかったとの事、やくぎな奴らでございませよ、私の手下

ながらあいづらは！ 肝心な二品を横取られてしまつて」

女勘助の手下達が、へまをやつたことを女勘助が、館林様へ詫びているのであつた。

「^{オチフルイ}十二神貝十郎は与力の中では、風変わりの面白い奴だ。その邸へ運んで行つたのなら、まあそれでもよいだろう」

館林様は案外平然と、怒りもせずにそんなように云つた。

「今度の仕事には間接ではあるが、最初から^{オチフルイ}十二神貝十郎が、関係をしていただけだから」

「それはさようでございますとも」

易者姿をした神道徳次郎が云つた。

「田沼の邸前で私達が、ままごと狂女達を雨やどりしながら、何彼と噂をしているのを、あの貝十郎が少し離れた所から、同じように眺めておりまして、大分考えていた様子でしたから、何かやるなどこのように思い、外伝に云いつけて後をつけさせますと、山大という指物店へはいり、『ままごと』のことを訊ねましたそうで、外伝も後からはいつて行つて訊くと、一月の十五日に『ままごと』を一個、松本伊豆守へ納めるとのこと。……早速お殿様へお知らせすると、『ままごと』を奪つてすり換えろというお言葉、その結果が今

夜になりましたので。……貝十郎というあの与力が、最初から関係していたものと、こう云えばこうも申せませすとも」

「これは偶然からであります。……」女勘助が笑いながら云った。「私は女の姿をしていながら、美しい女が好きなので、水茶屋『東』のお品の顔を見たく、度々あの家へ行っているうちに、お品の顔がお篠に似ていることや、お品の情夫まぶが旗本の伴の小糸新八郎だということや、お品が松本伊豆守に、引き上げられたということなどを知って、これはつきり伊豆守から、献上箱の人形として、田沼のもとへ届けるなど感付き、気の毒だなあと思いました。ところが今夜その新八郎が、道を歩いておりましたので、言葉をかけて誘って、私達の後からつけて来させましたが、今頃どうしておりますことやら」

「田沼め、『ままごと』や献上箱を、邸の内でひらいて見て、どんな顔をするのか、その顔が見とうございます」

こう云ったのは僧侶に扮した、鼠小僧外伝であった。

「ご馳走の代わりにむさい物が、しこたま詰められてあるのだからなあ」

こう云ったのは、六部姿をした、火柱の夜叉丸その者であった。

「酒の代わりにあれなんだからなあ」

こう云つたのは破落戸ならずものに扮した、稲葉小僧新助であり、

「献上箱の中の人形が、飛んだ爺おやしの人形なんだからなあ」

こう云つたのは紫紐丹左衛門で、武骨な侍の姿をしていた。

「それより人形の持つている、あの書物を田沼が見た時、どんなに恐れおののくことか、それを私は知りたいような気がする」館林様はこう云いながら、盃を含んで微笑した。

「田沼退治はこれからだ。次々に彼奴きやつを怯おびかさなければならぬ。……だんだんに彼奴の罪悪を、彼奴と世間とへ暴露しなければならぬ。……暴露戦術というやつがある。大金持ちや権謀術数で、権勢を握っている為政者などを、亡ぼしたり改心させたりするには、一番恰好の戦術だ。一方では心胆を寒がらせ、一方では世間の正しい批評を、仰がせることに役立つのだからだ」

田沼家へ行つた『ままごと』の中には、何がはいつていたのであろうか？

要するにむさい物であつて、飲めも食べも出来ないものであつた。では、献上箱にはいつていた物は？ 田沼主殿頭その人を、さながらに作つた人形であつて、しかもその胸には短刀が刺してあり、手には斬奸状が持たされてあつた。

一、その方屋敷内の儀、格別の美麗を尽くし、衣食並びに翫木石に至るまでも、天下比類なき結構にて、居間長押釘隠し等は、金銀無垢にて作り、これは銀座の者どもより、賄略として取り候ものの由、不届き至極。

二、諸大名官位の儀は、天聴へ奏達も有之、これあり至つて重き儀に御座候そうろうところ処、金銀をもつて賄賂すれば、容易く取り持ち、世話仕候不届き至極。

三、近年詮挙進途の権家は、皆その方親族の者ばかりにて、その方の召使いの妾等を願望の媒となし、なかだち度々登城仕らせ、殊に数日逗留、その節莫大の金帛相贈り、内外の親睦を結び置き候儀、不届き至極。

四、諸事儉約と申す名目を立て、自己のみ奢り、上を虐げ、下を搾取す。不届き至極。等々と云つたような条目が、斬奸状には連らねてあつた。

二月が来て春めいた。隅田川に沿つた茶屋の奥の部屋で、お品と新八郎とが媾曳きをしていた。

「お品、こいつを着けてやろうか」

新八郎は鉄で作つた、刺のある不気味の貞操帯を揺すつた。

「阿呆らしい」

とお品は一蹴してしまった。

「そんなもの嫌いでございます」

「お品、こいつを冠せてやろうか」

新八郎は驢馬仮面を撫でた。

「馬鹿らしい」

とお品は一蹴してしまった。

「男に冠せるとようございますわ」

「御意で」
ぎよゝい

と男の新八郎は云った。

「こういう刑罰の道具類や、こういう節操保持の機械は、女から男へ進呈すべきものさ。

……悪事は男がしているのだからなあ」

「浮世は逆さまでございますわね」

「御意で」

と新八郎は早速応じた。

「浮世は逆さまでございますとも。そこで大変息苦しい。そこで当分貝十郎式に、韜晦とうかいして恋にでも耽るがよろしい」

「でも、勇気がございましたら。……」

「あ、待つてくれ、勇気なんてものは、館林様にお任せして置け。……勇気なんてものを持とうものなら、お前となんか交際つきあう代わりに、ああいう六人の無頼漢どもと、交際つきあわなければならぬことになる……」

「では、勇気なんか、棄ててしましましょう」

あわててお品は勇気をすててしまった。

で、二人は幸福なのであった。

で、二人は平和なのであった。

現妖鏡

浅草の境内で、薬売りの藤兵衛が喋舌しゃべつていた。

「さあお立ち合いお聞きなされ。ここに素晴らしい薬がある。甲必丹キャピタンカランス様が和オラン

蘭ダの国から、わざわざ持って来た霊薬で、一粒飲めば神気が爽か！ 二粒飲めば体力が

増す。三粒四粒と毎日飲めば、女が一人では足りなくなる。つまり精力が逞たくまくなるのだ。

一月つづけて飲んで見なされ、妾を三人も囲いたくなる。生の活力、楽しみの泉、大きな

事業を行う源！ この薬に如しくものはない！ 負けてやるから沢山お買い。十粒入りが一

両とはどうだ！ 何高い？ 高いものか！ 一粒十両でも安いくらいだ。とは云え大道商

いだ、両という値は立てがたかろう。よろしいよろしい負けてやろう、十粒入りを一分に

してやろう。ナニこれでも高いというのか、どうも仕方がないもう少し負けよう、二十粒

入り一朱とはどうだ！ 何、何んだって、まだ高いって？ これは呆れて物が云えない！

楽しみの泉のこの薬が、そうそう安くてたまるものか！ とは云え大道商いだ、安く踏

まれるのは仕方あるまい。同じ品物でも玄閥構えの、ご大層もないお屋敷の中で、取り引

きをする段になると、十倍百倍になる世の中だからなあ。とかく虚飾が勝つ時世だ、そう

いう時世での大道商い、踏み倒されるのは当然だろうて。そこでよろしい悟りをひらいて、

ぐつと下値げしきに売ることしよう。二十粒入り十文とはどうだ！ もう負けないぞ買ったたり買ったり！ ……や、それはそうと大変なお方が、お立ち合いの中に雑ましっておられる。日本橋の大町人、帯刀をさえも許されたお方、名は申さぬが屋号は柏屋、ただしご主人は逝くなられた筈だ！ お気の毒にもお母様にも、二年前に逝くなられた筈だ！ その柏屋の一人娘、これもお名前は云わぬ方がよからう！ ナー二構うものか云ってしまえ！ さようお島様と云われる筈だ！ そのお島様が雑ましっておられる！ 顔色がお悪い！ ご病気だからだ！ お眼が悲しげにすわっておられる！ お心に悶もえがあられるからだ！ ……大家のお嬢様であられるのに、お供も連れられずたつたお一人で、悪漢わるや誘拐かどわか師しがうろついている、夕暮れ時の盛り場などへ、どうしてお越しになったのか？ 思案に余つたからであろう！ 途方に暮れられたからであろう！ ごもつとも様でご同情します！ 奇病！ 奇病！ 何んとも云えない奇病に、取りつかれておいでなされるからだ。……そこで藤兵衛は申し上げます、浅草を出て品川まで、すぐにもお出かけなさいませ！ 助けるお方が出て参りましょう！ 途中に変わったことがあつても、行つた先に変わったことがあつても、決して恐怖おそれなさいませ、救いの前には艱難かんなんがあり、安心の前には恐怖おそれがあるもので！ さあさあお出かけなさいませ！ 一人の立派なお武家様が、蔭身かげみに添そってあなた

様を、お守りなさるでございましょうよ」

藤兵衛を取り巻いて二十人あまりの、閑そうな人間が立っていた。そういう人達に立ち雑って、お島がやはり立っていた。

年は十九、美人であった。藤兵衛のお喋舌りが終えると一緒に、お島はフラフラと歩き出した、浅草の境内から誓願寺通りへ抜け、品川の方へ歩いて行く。神田の筋へ来た頃には、町へ灯火が点きはじめた。

身長は高かったが痩せていた。苦痛のために痩せたものらしい。眼が眼窩の奥にあった。苦痛のために窪んだのである。瞳が曇って力なげであった。歩く足もとが定まらない。

放心したように歩いて行く。——これがお島の姿であった。

ふとお島は振り返って見た。と、一人の侍が、彼女の背後から歩いて来ていた。

(薬売りの言葉は嘘ではなかった)

そう思ってお島は安心した。

(では一切あの男の言葉を、妾は信用することにしよう)

彼女は溺れかかっているのであった。藁をさえ掴まなければならぬのであった。藤兵衛の言葉は藁と云ってよかった。

——どうして自分の身の上と、どうして自分の心の苦痛と、どうして自分の病氣のことを、あの薬売りは知っているのでしょうか？ ……これが彼女には不思議であった。

不思議ではあつたがどうでもよかつた。あの男が妾を救つてくれるのなら。で彼女は云われるままに、品川へ行くこうとしていたのであつた。一人の立派なお武家様が、かげみ蔭身に添つてあなた様を、お守りなさるでございましょうと、こうあの薬売りの男が云つた。

侍が背後うしろから従ついて来ていた。その立派なお武家様なのであろう。彼女は今安心していった。

二

京橋の中ほどまで来た時である、彼女はすっかり疲つか勞れれてしまった。こんなに歩いたことがないからである。彼女はだるそうに足を止めた。

と、彼女の左側に、一挺の駕籠が下ろされた。そこで彼女は振り返つて見た。侍が手を上げて駕籠を指している。で、彼女は安心して、駕籠の中へ身を入れた。

こうしてお島を乗せた駕籠が、三月の月に照らされながら、品川の方へ揺れて行く後か

ら、袴なしの羽織姿の、その立派な侍が、大して屈托もなさそうに、しかし前後に眼を配って、油断を見せずに従って行った。

芝まで行った時であった、その横町から一人の旅僧が、突然現われて駕籠へ寄ろうとした。

「これ！」と侍が声をかけた。

旅僧はギョツとした様子であったが、何も云わずに後へ下がった。その間に駕籠と侍とは、先へズンズン進んで行った。

と、また横町から無頼漢のような、一人の男が飛び出して来た。

「これ！」

とたつたそれだけであった。駕籠と侍とは先へ進んだ。しかしまたもや横町があつて、その入り口へまで差しかかった時、一人の武士と売^{うらないしや}卜者^{うらないしや}とが、駕籠の行く手を遮^{さえぎ}るよう^{さえぎ}にして、その入り口から走り出た。

「これ！」と侍は声をかけた。「駕籠へさわるな！ 俺を知らぬか！ ……思うに恐らく今度の事件には『館林様』はご関係あるまい！ やり方があまりに惨忍に過ぎる！」

武士と売卜者とは黙っていた。その間に駕籠と侍とは進んだ。その駕籠と侍との遠退く

のを、四人の者は一つに塊かたまり、残念そうに見送ったが、

「どうも 十二神オチフルイに出られたのではね」売卜者風の神道德次郎が云って、テレ切ったように額を撫でた。

「それにちやあんと見抜いておる」こう云ったのは武士姿の、紫紐丹左衛門であった。

「館林様のご関係ないとね」

「せつかく浅草から狙つて来たんだが」鼠小僧の外伝が——旅僧の姿をした男が云った。

「ねっからこれでは始まらない」

「諦めるより仕方がないよ」こう云ったのは無頼漢ならずもの風の、稲葉小僧新助であった。「相手が十二神オチフルイとあるからには、六人かかったって歯が立たねえ。まして今は四人だからな」

この間もお島を乗せた駕籠と、与力十二神オチフルイ貝十郎とは、品川の方へ進んで行った。品川の一角、高輪の台、海を見下ろした高台に、宏大な屋敷が立っていて、大門の左右に高張り提灯が、二棹さお威光を示していた。

その前まで来ると駕籠が止まり、お島が駕籠から下ろされた。

「こつちへ」

と貝十郎は声をかけたが、潜りの戸を軽く打ち、開くのを待つて内へはいった。で、お島も内へはいった。大門から玄関へ行くまでの距離も、かなりあるように思われた。

宏大な屋敷の証拠である。

おとな
訪うと小侍が現われた。

「拙者 オチフルイ 十二神貝十郎でござる」

すると小侍はすぐに云った。

「は、お待ちかねでございます。どうぞずっと奥の部屋へ」

そこで貝十郎はお島を従え、玄関を上がって奥へ通った。長い廊下や鈎手の廊下や、いくつかの座敷が二人を迎え、そうして二人を奥へ送った。

広い裏庭が展開ひらけていて、木立や築山や泉水などがあり、泉水の水が木洩れの月光に、チロチロ一所光っていた。その裏庭の奥まったところに、別棟の一軒の建物があつて、長い廊下でつながれていた。

「こつちへ」と貝十郎はまたも云つて、お島の先に立つて進んで行つた。

その建物の内へはいり、座敷の様子を眺めた時、お島は異人館へ来たのかと思った。

瓔珞ようらくを垂らした切子形きりこの、ギヤマン細工の釣り灯籠とうろうが、一基天井から釣り下げられ

ていたが、その光に照らされながら、いろいろの器具、さまざまの織物、多種多様の道具類、ないしは珍らしい地図や模型、または金文字を表紙や背革へ、打ち出したところの沢山の書籍、かと思うと色の着いた石や金属、かと思うと気味の悪い人間の骸骨がいこつ、そう云つたものが整然と、座敷の四方に並べられてあり、壁には絵入りの額がかけてあり、柱には円錐形の鳥籠があつて、人工で作つたそれのような、絢爛けんらんたる鳥が入れてあるからである。

そうしてそれらの一切の物へは、いちいち札がつけてあつた。硝子ガラス細工らしい長方形の器具が、天鵞絨ビロードのサツクへ入れてあつたが、それへ附けられた札の面には、テルモメートルと書かれてあり、四尺四方もあるらしい、黒塗りの箱の一所から、筒のようなものが見出しており、その先にレンズの嵌まつている器具には、ドンクルカムルと記された札が、その傍らに立ててあつた。長さ五尺はあるらしい、太い竹筒を黒く塗つたような、二所ばかりに節のある器具——先へ行くに従つて細くなり、その突端にレンズのある器具に

は、ルーブルと書いた札がつけてあった。

そういう座敷の一所に、一人の侍が端坐して、それらの物を眺めていたが、貝十郎とお島とを見ると、気軽そうに挨拶をした。

「これはようこそ、まあまあお坐り」

「吉雄殿、お話しのお島という娘で」

貝十郎はこう云つてから、お島の方へ声をかけた。

「大通辞の吉雄幸左衛門殿じゃ」

お島は恭しく辞儀をした。それを幸左衛門は軽く受けたが、

「いかさま美しい娘ごじやな。こういう娘ごの命を取ろうなどは、いやとんでもない悪い奴らで。……が、もうご安心なさるがよい。今夜で危険はなくなりましょう」

「いつ見てもこの部屋は珍らしゆうござるな」

貝十郎は見廻しながら云つた。

「見物が多うございましょうな」

「さよう」と幸左衛門は微笑した。「応接に暇がないほどでござる」

「平賀源内殿、杉田玄伯殿など、相変わらず詰めかけて参りましょうな」

「あのご両人は熱心なもので。その他熱心の人々と云えば、前野良沢殿、大槻玄沢殿、桂川甫周殿、石川玄常殿、嶺春泰殿、桐山正哲殿、鳥山松園殿、中川淳庵殿、そういう人達でありましょうか。その人々の見物の仕方が、その人々の性格を現わし、なかなか面白いございます」

「ほほう、さようでございますかな。どんな見方を致しますので？」

「前野良沢殿、大槻玄沢殿、この人達と来た日には、物その物を根掘り葉掘り尋ね、その物の真核を掴もうとします」

「それは真面目の学究だからでございます。あの人達にふさわしゅうござる。蘭医の中でもあのご両人は、蘭学の化物と云われているほどで」

「ところが平賀源内殿と来ると、ろくろく物を見ようとせず、ニヤリニヤリと笑つてばかりおられ、このような物ならこの源内にも、作り出すことが出来そうで——と云いたそのような様子をさえ、時々見せるのでございますよ」

「アツハツハツ、さようでございます。平賀殿はいうところの山師、山師というのは利用更生家、新奇の才覚、工面をなして、諸侯に招かれれば諸侯を富まし、町人に呼ばれれば町人を富まし、その歩を取つて自分も富む——と云う人間でありますからな。このような物

を一眼見ると、それを利用してそれに類した物を、なるほどあの仁なら作られるでござろう。……それはそうとカランス殿には」

貝十郎は改まって訊ねた。

「奥の部屋においてでございます」

「では」と貝十郎は立ち上がった。「吉雄殿にもどうぞ一緒に」

「よろしゅうござる」と幸左衛門も立った。

二人につづいてお島も立ち上がり、二人につづいて奥の部屋の方へ行つた。

お島に取つてはこの部屋も、この部屋にある諸の器具も、五十年輩で威厳があつて、それでいてどことなく日本人ばなれしている、吉雄幸左衛門という人物も、驚異には値あたして

いたが、不思議と恐怖には値していなかった。
(この人達なら助けてくださるだろう)

かえつてそんなように思われたのである。

四

一本の蠟燭ろうそくがともっていて、その火を映した巨大な鏡が、部屋の正面の壁にあり、蠟燭の立ててある台の側に、長髪、碧眼、長身肥大、袍ガウンをまとった紅毛人が、椅子に腰かけて読書をしてい、それらの物の以外には、ほとんどこれという器具調度はない——と云う部屋は蠟燭の火と、それを映している鏡の反射とで、他界的と云おうか夢幻的と云おうか、そう云ったような言葉をもつて、形容しなければならぬような、微妙な暗さに色彩いろどられている。

お島と貝十郎と幸左衛門とが、はいつて行ったところの奥の部屋は、そう云ったような部屋であった。

すぐにお島は恍惚うつとりとなつた。その部屋の光景に魅せられたのである。

紅毛人は立ち上がったが、お島の顔を射るように見た。それから幸左衛門へ何やら云つた。異国の言葉で云つたので、一言もお島には解らなかつた。

幸左衛門が異国の言葉で、紅毛人へ何か答えた。それからお島へ囁くささやように云つた。

「和蘭オランダの甲必丹キャピタンカランス殿じや。このお方がお前様を助けてくださる」

そこでお島は頭を下げ、真まごころ心からオドオドとお礼を云つた。

「カランス様有難う存じます。どうぞよろしくお願いいたします」

もちろん日本語で云つたのであるから、カランには意味は解らなかつたが、お島の態度のつましさが、その好感を招いたらしく、彼は領いて微笑をした。と、その時貝十郎が、お島の耳もとで囁いた。

「そなたの苦しい境遇と、そなたの不思議な病気につき、私は探つて知つたのだ。いや探らせて知つたのだ。その結果を吉雄殿に話し、吉雄殿からカラン殿に話し、カラン殿の力によつて、そなたの身の上に振りかかつている、危難を助けていただくことにした。

……あの薬売りの藤兵衛という男に、ああいうことを云わせたのも、このオチフルイ十二神貝十郎なのだ。安心して一切を委まかせるがよい。と云うのはこれからこの部屋の中へ、そなたの胆を奪うような、奇怪な出来事が起こるからだ。驚いて気絶などしないように」

「はい有難う存じます。厚くお礼を申し上げます」

——で、お島はまた辞儀をした。もうこの頃は今の時間にして、午前の一時を過ぎくろぬのていた。お島に病気が起こる頃であつた。見ればカランは両手をもつて、大きな黒布くろぬのを持つていた。あのスペインの鬪牛師が、鬪牛に向かつて赤い布を、冠せようとして構え込む、ちようどあのような構え方で、黒布を持ち構えているのであつた。と、そういうカランが、幸左衛門へ向かつて云つた。それを幸左衛門が通訳した。

「お島殿、カランス殿が仰せられる、鏡を一心にご覧なされと」

「はい」と素直にお島は云つて、鏡の面を凝視した。鏡は朦朧もうろうと霞んでいた。煙りが凝つていると形容してもよく、朝の湖水の一片が、張り付いていると形容してもよかつた。

物を写してはいなかつた。四人立っているその四人の、誰もが写っていないかつた。立っている位置のかげんからではあるが、蠟燭も写っていないかつた。光は受けてはいたけれど、形を写していないのである。しかし間もなくその鏡面へ、仄ほのかに物の形が写つた。

(妾わたしが病気になる時刻が来た)

そうお島が思つた時に、物の形が鏡へ写り出したのである。ぼんやりと見えていた物の形が、次第にハッキリとなつて来た。それは立派な部屋であつた。

その部屋に三人の男女がいた。一人は白衣を着た修験者であり、一人は島田に髪を結つた、美しい若い小間使いであり、一人は四十を過ぎたらしい、デツプリと肥えた男であつて、大店おおだなの旦那とでも云いたいような、人品と骨柄とを備えていた。

「あッ」とお島は声を上げた。

「妾の……小梅の……寮のお部屋だわ！ ……お菊と、叔父様と大日坊とがおられる！」

その時鏡中に変化が起こつた。三人の間に机があつたが、その上に一個の人形が、大切

そうに立てられたのである。

五

事件は過去へ帰らなければならない。

隅田川の畔^{ほとり}、小梅の里に、風雅と豪奢^{ごうしゃ}とを兼ね備えた、柏屋の寮が立っていた。一人娘のお島というのが、乳母や小間使いに守られて、寂しく清く住んでいた。

父母に逝^いかれた孤児であった。が、日本橋の店の方は、古い番頭や手代達によって、順調に経営されていた。お島が柏屋の戸主であった。しかし女であり未婚であり、年若であるところから、叔父の勘三が後見をしていた。

寮に住居をしているのは、父母に逝^いかれた悲しさから、気鬱の性になったのを、癒^いそうとしてに他ならなかった。

ところが今から一月ほど前から、彼女は不思議な病気となった。真夜中になると唐突にも、胸に痛みを覚えるのである。それも尋常の痛みではなくて、鋭い刃物か針のようなもので、心臓をえぐられるか刺されるかのような、そう云った烈しい痛みなのである。そう

いう病氣を得て以来、彼女は見る見る衰弱した。いろいろの医者にも診て貰ったが、病氣の原因は解らなかつた。

そういう病氣の起る前に、叔父勘三の指金さしがねで、お菊という女を小間使いに雇った。美しい若い勝ち気な女で、人もなげに振る舞うこともあつたが、それだけ万事に気が付いて、浮世の表裏をよく知つてゐる女、そう云つた女に異存はなかつた。

「よいお前の話し相手になろう」

お菊のことをお島へこう勘三は云つた。

しかし事實はそうではなくて、そのお菊の話し相手になるのは、かえつて叔父の勘三なのであつた。お菊が小間使いにはいつて以来、勘三はしげしげこの寮へ来て、お菊を側へ引きつけて、ふざけたり酒の酌をさせたりした。噂によるとお菊と勘三とは、以前から知つてゐる仲であつて、それでお菊を小間使いとして、この寮へ入れたのだということであつた。いわば勘三はお菊という女を、名義だけをお島の小間使いとし、事實は自分の妾として、この寮へ引き入れたということになる。そのお菊はどうかというに、これは勘三をむしろ嫌つて、お島へ好意を寄せていた。姉のように優しい慈愛の眼で、よくお島を見守つたりした。で、お島もお菊に対して、好感を持たざるを得なかつた。いやいやむしろ好

感以上の、同性の恋というような、ああ云つた特殊の感情をさえ、お島は持たざるを得なかつた。もつともそれをそそつたのは、小間使いのお菊ではあつたけれど。

ある時などは二人の女が、お島の部屋で物も云わず、互いにその手を握り合つて、互いに頬を寄せ合つて、うつとりとしているようなことがあつた。同性ではあるが二人の肌が、着物を通して触れ合つて、その接触から来る温あたたかみを、味わい合つていと云いたげであつた。

お島の憂鬱を祈祷きとによつて、快癒させようと心掛けて、大日坊という修験者を、この寮へ出入りさせて、祈祷させるように取り計らつたのは、お菊が小間使いとして住み込んで、十日ほど経つてからのことであつた。云い出したのは勘三であつた。お菊は好まない様子であつた。それだのに勘三はある日のこと、お菊に向かつてこんなことを云つた。

「お前が大日坊を勧めたのじゃアないか。何んだ、それだのに今になつて」

大日坊は物々しい、白の行衣などを一着して、隔日ぐらいにやって来て、お島の前で祈祷をした。

と、どうだろう、娘のお島は、そういう祈祷が始まつた頃から、例の奇病に取りつかれてしまつた。しかし勘三も大日坊も云つた。

「病氣の癒りなほかけというものは、かえって苦しみを増すもので、その胸の痛みもやがて癒ろう。それと一緒に気鬱性も、綺麗に癒つてしまふだろう」と。

しかしお島のその奇病は、いよいよ勢力を逞しゆうして、お島は眼に見えてやつれて行つた。ところがある日この察へ、一人の酒屋のご用聞きが来た。出入りの杉屋という酒屋があつたが、そこへ来たご用聞きだということである。

「これからは私がご用をききに來ます。どうぞ精々ひいきご最願ひいきに。へい、私は仙介という者で」
 などお三どんや仲働きや、庭掃きの爺やにまで愛嬌を振り撒いた。三十がらみの小粋な男で、道樂のあげくにそんな身分に、おつこちたといいたそうなどころがあつた。

「ご用聞きには惜しいわね」などとお三どんは仙介のことを、仲働きへ噂したりして、仙介の評判は来た日から良かった。がしかしお菊だけは、その仙介を胡散うさんそうに見た。

「あの男の眼付き、気に食わないよ。それにさ、手の指が白すぎるよ。食わせもののご用聞きだよ」などと云つて警戒した。

こうして今日の日の前日になつた。

この日も大日坊はやつて来て、お島の前で祈祷したが、それが終わると奥へ行き、勘三とお菊と三人で、何やらヒソヒソ話し出した。それから酒になつたようである。

「大日坊、今日は泊まっておいで」

などという勘三の声が聞こえた。

「そうねえ、大日坊さん泊まって行くがいいよ」

お菊の声も聞こえたが、何んとなく不安そうな声であった。

「姉ちゃん、お庭へ行って遊びましょうよ」

こういう間にお島の部屋では、お島にとっては姪めいにあたる、八歳のお京という可愛らしい娘が、お島に向かって甘えていた。

六

お島は寂しいところから、一つは姪のお京の家が、貧しい生活をしているところから、お京を寮へ引き取って、玩具おもちゃの人形でも愛するようにして、ずっと以前から育てて来た。お京は愛くるしい性質で、悪戯いたずらもしたがその悪戯さえ、可愛らしく見えるという性たちであった。

「姉ちゃんお庭へ行って遊びましょうよ」

しかしお島は黙っていた。いつもよりは今日は気持ちが悪く、返辞をするのさえ大儀だからであった。

「姉ちゃんお庭へ行つて遊びましょうよ」

お京はなおもせがんだが、お島が返辞をしないので、つまらなそうに部屋を出て、一人で庭の方へ行こうとした。と、奥から賑やかな、人々の笑い声が聞こえて来た。お京へ子供らしい好奇心が起こつて、奥の方へはいつて行つた。

酒盛りをしている次の部屋が勘三の常時いつもいる部屋であつて、高価な調度などが飾り立ててあつた。その部屋までお京がはいつて行つた時、彼女の心を惹く物があつた。手文庫の抽斗ひきだしが半ば開いていて、人形の顔が見えていたのである。

「まあ」

と彼女は嬉しそうに云つて、抽斗からそつと人形を取り出し、部屋を出て庭へ走り出た。庭には午後の日があたつていて、遊ぶによくポカポカと暖かかつた。

山吹がこんもりと咲いていて、その叢くさむらの周囲まわりには青み出した芝生しとねが、茵しとねのように展べられていた。山吹の背後うしろには牡丹桜が重たそうに花を冠つていた。お京は芝生へ坐り込んだが、人形を膝の上へ大事そうに乗せると、しばらく熱心にもてあそんだ。

それは縫いぐるみの人形であつて、派手な振り袖が着せてあつた。大きさはおよそ五寸ぐらいで、顔は十八、九の女の顔であつた。

そうやってしばらくもてあそんでいたが、そこは子供のことであつた、やがて飽きると抛り出して、何やら流行唄はやりうたをうたい出した。と、その時一人の男が、こつそりとこつちへ近寄つて来た。今まで勝手口でお三どんを相手に、油を売っていた仙介であつた。

「おやおやこれはお嬢さんで、……日向ぼつこでございませうかな」

こんなことを云いながら近寄つて来たが、抛り出されてある人形を見ると、すぐに取り上げてじつと見た。

「……………」

何んとも云いはしなかつたが、仙介の眼の光つたことは！ とにわかに「痛い！」と云つた。

見れば仙介の拇指おやゆびから、血がポツツリと吹き出している。人形の胎内に針があつて、強く握つた時その先が、拇指の一所を刺したものと見える。

「そうか！」と仙介は思いあつたように云つた。

「これですつかり見当が付いた！」

どうしようかと云つたように、一瞬仙介は考え込んだが、チラリとお京へ眼を移してから、素早く人形を懐中しようとした。が、その時植え込みの背後うしろから、

「お嬢様！」

と呼ぶ声が聞こえて来たので、あわてて仙介は人形を取り出し、お京の膝の上へ投げようように置き、庭を横切つて姿を消した。それと引き違いに姿を現わしたのは、他ならぬ小間使いのお菊であつた。

仙介の後を見送り見送り、お京の側までやって来たが、お京の膝の上の人形を見ると、ギョツとしたように眼を躍らせ、すぐに取り上げて袖の中へ引き入れ、つかつかと家の方へ走つて行つた。

七

オチフルイ

十二神貝十郎の邸の玄関へ、同心の佃三弥と連れ立ち、仙介が姿を現わしたのは、それから間もなくのことであり、二人の姿が邸の中へ消え、やがて邸から現われたのも、それから間もなくのことであり、十二神貝十郎がそれと続いて、邸から出て駕籠に乗り、品

川にある和蘭客屋を、訪ねたのも間もなくのことであつた。

こうしてこの日は暮れてしまった。

さて、いよいよ今日の日である。昨日から泊まり込んでいた大日坊は、この日もお島に祈祷をした。お島の衰弱はいちじるしく、放心状態になっていた。しかも心ではどうともして、この苦しみから遁がれ出たいものと、あえぐがように願っていた。祈祷が終えると部屋から脱け出し、夢心地のように庭へ出たが、庭を脱けると当てもなく、両国の方へ歩いて行つた。

(寮は妾わたしにはまるで地獄だ。あそこの空気は息苦しい。あそこの空気は寂しくて凄い。賑やかで楽に呼吸のつける、どこかへ妾は行ってしまいたい)

彼女はこういう心持ちで歩いた。そういう彼女を寮の近くから、後を尾けて来た侍があつたが、他ならぬ十二神貝オチフルイ十郎であつた。

(どうぞして誰にも悟られないように、あの娘を連れ出そうと思つていたところ、幸い自分から脱け出して来た。さてこれからどうしたものだ)

貝十郎は思案しいしい、お島の後から尾けて行つた。

両国を渡り浅草へはいり、お島が薬売りの藤兵衛の剽ひょうぎん軽の口上を放心的態度で、聞きながら佇たたくんでいるのを見ると、貝十郎は頷いた。

（一つ暗示を与えてやろう。ああいう娘には暗示がかかる。藤兵衛を利用して暗示をかけてやろう）

喋舌うしろつている藤兵衛の背後に廻つて、貝十郎が藤兵衛の耳へ、立ち合いの群集に気づかれないように、囁きかけたのはそれからであり、藤兵衛がお島へお島のことを、話しかけたのもそれからであつた。

ここで事件は和蘭オランダ客屋の、奥の部屋へ歸つて行かなければならない。鏡へお菊と大日坊と勘三との姿が写つていて、お島ににせた人形が、机の上に置いてあつた。

三人は何やら云い争い出した。勘三が最も多く喋舌り、大日坊へ何かを強いているようであつた。それをお菊が悩ましそうに、熱心に止めている様子であつた。そういう二人の間まに立つて、大日坊は当惑している様子であつたが、やがて何やらお菊に向かつて、訓さとすさがように説き出した。その三人であるが、話し合っている間じゆう、机の上の人形の方へ、たえず瞳を注いでいた。

そういう光景が黒塗り蒔絵の、額縁を持った大鏡の中で、芝居でもあるかのように、ハッキリと写っているのである。

大日坊はお菊を説き伏せたようであつた。お菊を説き伏せた大日坊は、やおら人形へ近よると、鋭く人形を凝視した。手に戒刀を握っている。と、その戒刀が頭上へ上がった。思う間もなく切り下ろされた、と、その瞬間鏡中の世界を、佇んで見ていたお島の体へ、頭上からフワリと布が冠かぶされた。

甲キヤビタン必丹カランスが背後から、手に持っていた黒布くろぬのを、その瞬間に冠かぶしたのであつた。

「あれ！」

とお島は意外だつたので、黒布くろぬのの中で声を上げた。しかしその次の瞬間には、黒布くろぬのは既に取り去られていた。お島は鏡中の世界を見た。三人の男女が審いぶかしそうに、人形を取り上げて調べている。戒刀で人形を切ろうとしたのらしい。しかるに人形が切れなかつたので、驚いているという様子であつた。人形が机の上へ置かれた。また大日坊は戒刀を振り上げた。

その戒刀が鏡の中で、白く横の方へ流れた時、またもお島は背後から、黒い布で全身を包まれた、が、その刹那せつな迂濶千万にも、お島は髪を崩すまいとして、片手で黒布を上へ揚

げた。その拍子に指の先が布から出た。

「痛い！」とお島は悲鳴を上げた。

布が体から取り去られた時、お島の右の手の中指の先から、血が掌の方へ流れていた。切り傷がそこについている。と、鏡中の世界の人は、またも人形を取り上げて、奇怪至極だというように、その人形を調べ出した。人形の左の手の中指に、どうやら傷でもついたらしく、そこを三人は調べ出した。

またもや人形は机の上へ置かれ、またもや大日坊は戒刀を振り冠った。そうしてまたもやお島の全身が、黒^{くろぬの}布によつて蔽^{おお}われた。しかしその布が取り去られた時、お島の体には異変はなかつたが、鏡中の人々には異変があつた。戒刀が折れて折れた先が、勘三の咽喉を貫いていた。

八

この頃小梅の柏屋の寮を、取り囲んでいる人影があつた。目明し、橋場の仙右衛門が、同心佃三弥に指揮され、乾^{こぶん}兒十二人と一緒になつて、捕り物をすべく囲んだのであつた。

不意に深夜の静寂を破り、男の悲鳴が家の中から聞こえ、つづいて騒がしい人声が起こり、つづいて雨戸を蹴開く音がし、すぐに男女の人影が、裏木戸の方へ走って来た。

「御用！」

「何を！」

「勘助御用だ！」

「仙介か！……やっぱり……岡つ引だつたな！」

「やい、神妙にお縄をいただけ！」

「……………」

「夜叉丸！ 手前も……年貢の納め時だ！」

「馬鹿め！ 人足！ 捕れたら捕れ！」

小間使いお菊の女勘助と、大日坊の火柱夜叉丸とは、戸を蹴破って飛び出した。

ご用聞きしやくじょうの仙介に身をやつしていた、目明しの仙右衛門は飛びかかった。ガラガラという錫杖しやくじょうの音！ 月光に閃めく匕首の光！ ムラムラと寄せ、ガツと引つ組み、バタバ

タと仆される捕り方の姿！ 枕橋の方へ一散に走る、夜叉丸と女勘助との姿が見えた。

「廻れ！ 右の方へ！ 三三みめぐり囲の方へ！」同心佃三弥が叫んだ。

「旦那、冗談、そんな方へ行つては！ 奴ら、枕橋の方へトツ走つていまきあ！」

仙右衛門は不審そうにこう叫んだ。

「黙れ！ よい、俺の云う通りにしろ！」

——で、捕り方はそつちへ走つた。

そのため明和六人男と呼ばれた、六人の盗賊のその中の二人、女勘助と火柱の夜叉丸とは捕縛されることを免れた。

後日貝十郎は云つたそうである。

「柏屋の主人の六斎殿と、私とは遊里の友達なので、あの仁の死後も遺族については、絶えず注意をしていました。するとお島という一人娘が、変な病気にかかったという。そこで佃という同心に命じ、その様子を調べさせたところ、佃は目明しの仙右衛門という男を、ご用聞きにやつさせて調べさせたそう。すると呪いの人形が、あそこの寮から出て来ました。その前にあの寮へ大日坊という、怪し気な修験者が入り込むことや、日頃から腹のよろしくない、叔父の勘三が入り込むことや、その勘三の妾のような女が、小間使いとして入り込んだという、そういうことが解つていましたので、さてはお島を呪い殺し、勘三

が柏屋を乗っ取る気だなど、こう目星をつけたという訳で。一味を引つ捕えて調べるのは、訳のない話ではありませんが、それでは柏屋に瑕キズがつくし、呪いとあつてはお島の命が、その間に取られてしまうかもしれない。これは困つたなど思いましたが、その時フツと考えついたのは、懇意にしている大通辞の、吉雄幸左衛門殿のことでした。この仁じんは西洋の学問が出来る。その方面で呪いというようなものを、至急に防ぐことが出来るかもしれない。……で、行つてお話をしたところ、甲必丹キャピタンのフランス殿が引き受けたという。……で、安心してお島を連れ出し、和蘭客屋オランダの奥の部屋で、ああいうことをして呪いを破り、その上悪事の元兇の、勘三をあべこべに自滅させた訳で。……しかし、どうしてああいう事が、ああして呪いを破つたのかは、とんと私にも解りません。が、東洋流の精神科学を、西洋流の精神科学が、退治したのだとは云われましょう。……女勘助や夜叉丸は、悪い奴らではありますが、私の敬まつている館林様が、手先てまきにしている奴らでしたから、捕えることだけは止めにしました。佃に旨を云い含めた訳です。嚇しただけで追っ払えと」

お菊の女勘助が、お島を時々救おうとしたのは、お島に恋を感じたからであつた。その勘助を妾のようにして、勘三が小間使いに住み込ませたのは、事実勘助を女だと思ひ、そ

うやうやと住み込ませて置くうちに、物にしようと思つたからであつた。

お島がお菊を恋したのは、結局同性の恋ではなく、異性同士の恋なのであつたが、お島はそれを知らなかつた。最後まで知らなかつたということである。

海外の歌

一

「桜月夜で明るいじやアないか！ それを何んだい、ぶつかりやアがつて！」

無頼漢風の逞しい男が、自分の方からぶつかりながら、こう京一郎へ難題を出した。

「とんだ粗相をいたしました、真^まつ平^{びら}ご免くださいますよう」うるさいと思つたので京一郎は詫びた。

「いけねえいけねえ言葉ばかりじやアいけねえ、やい何んとか色をつけろ！」

「色をつけろとおっしゃいますと？」

「解らねえ奴だな、いくらか出せ！」

「へええお錢をでございますかな」

「あたりめえよ、膏藥代だ」
こうやく

「と云うと怪我でもなさいましたので」

「え、怪我？ うん、したした！ 大変もない怪我をした。だからよ、出しな、膏藥代を
さ！」

「ちよつと拝見いたしたいもので」

「ナニ、拝見？ 拝見とは何をよ？」

「大変もない怪我という奴を」

「うるせえヤイ！ 青瓢箪め！」

拳が突然空に流れた。素早く京一郎は身をかわしたが、その手には拳が握られていた。

「ただの町人の小倅とは、小倅なりが少し違うぞ」

「痛え痛え人殺しイーツ……やい皆みんなな出て来てくれ！」すると背後から四人の男が、姿を
現わして走って来た。

（しまった！）——で京一郎は逃げた。ここは京橋の一画で、本通りから離れた小路であ

った。両親に内証で町道場へ通い、一刀流の稽古をしていたが、いつもより今日は遅くなつたので、道を急いでの帰るさであつた。

背後から追つかけて来るらしい。京一郎は横へ逸れた。と、運悪く袋露路で、妾宅めいた家によつて、見れば行く手をふさがれている。

(どうしたものだ！これは困つたぞ！)——で、当惑して立ち止まつたとたんに、眼の前の格子戸が内から開き、

「とんだ事ねえ、さあいらつしやい」なま艶めいた女の声がして、つづいて白い手が伸びて来た。

「いえ、私は……」

「大丈夫なのよ」

ガラガラと京一郎の背のうしろで、閉ざされる格子戸の音のした時には、京一郎の体は家の中にあつた。

見失つたというように、無頼漢風の男をまじえ、五人の男が露路から出た。本通りの方へ引つかえして行くのを、一軒の家の二階から——細目に開けた障子の隙から、眺めてい

た一人の武士があつたが、

「また彼奴きやつら悪いことをやり出したな」

眉をひそめながら呟いた。与力の十二神貝オチフルイ十郎であつた。

「旦那、喧嘩ね。気味の悪い」

ちやぶ台があつてご馳走があつて、徳利と盃とが置いてあり、一方の側には貝十郎がおり、一方の側には女がいたが、その女がそんなように云つた。

「喧嘩といえば喧嘩だが、性たちの悪い喧嘩でな」

「性たちのよい喧嘩つてありますかしら」

「出合い頭の間違いで、ぶん撲り合うというような、そういう喧嘩は性のいい喧嘩だ」

「性の悪い喧嘩といえば？」

「計画的に仕掛けた喧嘩さ。……それはそうと、こういうお妾横丁には随分喧嘩はあるだろうな」

「そうですねえ、まあ、ちよくちよく」

「ところで突きあたりの格子づくりの家だが、やはり妾の巢だろうな？」

「巢とはお口のお悪いことね。でも、ええ、お妾さんの巢のようだわ」

「一、二度見かけたことがあるが、そのお妻さん美しい縹緞だった」

「そこでちよつかいを出そうと云うのね」

「うっかりちよつかいを出そうものなら、あのお妻さんくらいつくよ」

「鬼や夜叉じゃアあるまいし」

「それ以上に凄^{たま}い玉かもしれない。顔に陰のある女だった……旦那というのはどんな男かな？」

「旦那だか何んだか知らないけれど、時々駕籠で立派なお武家さんが深夜においでなさるようです」

「他にも男が出入りするだろう？」

「よくご存知ね。四、五人の男が……」

「物など持ち運んでは来ないかな？」

「おや、そう云えばそんなことも……でもどうしてご存知なんでしょうね？」

「俺の身分を知っているくせに、何を云うのだ。うっかりした女だ」

「そうそう旦那は与力衆でしたわね」

「今後は殿様と呼ぶがいい」

「結城ぞつきのお殿様ね」

「文句があるなら唐とうざん棧せんでも着るよ」

「いいえ、殿様と云わせたいなら、黒羽二重の紋服で、いらせられましようところ申すの
ッ」

「そういう衣装を着る時もある。が、その時には同心が従つく」

「目明し衆も従つくんでしょうね」

「お前なんかすぐふん縛むする」

「おお恐こわ々こわ！」と大仰おごに云ったが、妾のお蔭は寄り添ようようにした。「でも殿様に似合
うのは、そういう風じゃありませんわね」

「河東節の水調子　二人が結ぶ白露を、眼もとで拾ひろうのべ紙の——などと喉のどをころがし
て、十寸蘭洲ますみとどつちがうまい？　などと云っている俺の方が仁にあうと云うのだろう」

「そうよ」とお蔭はトロンコの眼をした。「椰なぎの枯れ葉の名ばかりにさ。……殿様、今

夜は帰しませんよ」

「まてまて」貝十郎は大小を取った。「与多よたは与多、仕事は仕事だ。……俺はちよつから行つて来る」

「どちらへ？」

と驚いて止めるお蔭を、ちよつと尻眼で抑えるようにし、「お前を相手に割わりせりふ白か何んかで、茶化したことばかり云つていて、それで暮らして行けるなら、とんだ暮らしいい浮世なんだが、まるつきり逆の世間だな」

「遊んでおいでなされても、役目は忘れないとおっしゃるのね」

「それくらいなら御おんの字だ。遊びを役目の助けにしている——と云う荒つぽい時世なのさ」
妾宅を出ると貝十郎は、露路の突きあたりの家の前まで行った。が、そのまま姿が消えた。

「手頼たよりない身でございますの、これをご縁にどうぞ再々、お遊びにおいでくださいませ
てお力におなりくださいますよう」

お蝶はこう云つて京一郎の顔を、艶めいた眼でながしめに見た。年は二十一、二でもあ

ろうか高い鼻に切れ長の眼に、彫刻的の端麗さをそなえた、それは妖艶な女であつた。

「はい、有難う存じます。妙なことからお目にかかり、飛んだおもてなしにあずかりまして、何んと申してよろしいやら。……ご迷惑でなければこれからも、ちよいちよいお伺いいたします」

京一郎は恍惚うっとりとした心で、こう云つて頬を掌で撫でた。五人の男に追いかけられ、それが因になつて飛び込んだ家の、女主人にこんな愛想よく、迎えられようとは思わなかつた。

茶を出され酒を出され、身の上話さえされたのである。両親のない身の上ながら、親が残して行つた金があるので、女中と婆やとを二人ほど使い、男気のない女世帯を、このようなひっそりした町の露路で、しばらく前から張り出したが、その男気のないということが、何より寂しいと云うのであつた。

父は生前は長崎あたりの、相当名を知られた海産問屋で、支那や和蘭オランダとも貿易をし、盛大にやつた身分であつた。——などとお蝶は話したりした。しかしお蝶は身の上については、多く語ろうとはしなかつた。隠すというのではなかつたが、目下の生活が華やかでない、それだのに過去の華やかであつた生活くらしを、今さらになつて話すのは、面はゆくもあ

れば笑止でもあると、そんなに思う心から、語らないというような態度を見せた。そういう態度が京一郎には、床ゆかしく思われてならなかった。

表構えは粹であり、目立たぬ様子に作られてあつたが、家の内は随分豪奢ごうしゃであり、それに調度だの器具だのが、日本産というより異国産らしい、舶来の品で飾られてあり、お蝶の締めている帯なども、和蘭オランダ模様模様に刺繡ぬいとりされてある——そういう点などがお蝶という女の、父だという人の身分や生活を——昔の身分や生活を、それらしいものに想像させた。

「風変わりの楽器でございましょうが……」

こう云つてお蝶は手を伸ばして、床の間に置いてある異風の楽器を、取りよせてそつと膝の上へ据えた。胴が扁平で三角形で、幾筋かの絃いとで張ひられていた。

「象牙の爪で弾くのですけれど……」云い云いお蝶は四辺あたりを忍ぶように、指の先で絃を弾いた。

「バラードという楽器でございませう。和蘭オランダの若い海員などが甲板かんぱんの上などで弾きませうで」

バラードの音色は聞く人の心を、強い瞑想に誘つて行つた。

聞いている京一郎の心の中へ、海を慕う感情が起こつて来た。海！ 海外！ 自由！
不^ふ羈^き！ ……そういうものを、慕う感情が、京一郎の心へ起こつて来た。不意にお蝶はう
たい出した。

三

かすかに見ゆる

やまのみね

はれているさえなつかし

舟のりをする身のならい

死ぬることこそ多ければ

さて漕ぎ出すわが舟の

しだいに遠くなるにつれ

山の裾辺の麦の小田^{おだ}

いまを季節とみのれるが

苅りいる人もなつかしし

わが乗る船の行くにつれ

舟足かろきためからか

わが乗る船の行くにつれ

色も姿もおちかたの

ふかき霞にとざされぬ

われらの舟路！ われらの舟路！

それはこういう歌であつたが、ここまでうたつて来るとうたい止めた。

「この後にもあるそうではございますが、残っていないのでございます。ええこの後にも続く歌が。……妾わたしはどんなに後に続く歌を、知りたいと願っているでしょう。……死なれたお父様が死なれる前に、妾にこのように申しました。『後あとに続く歌を知ることが出来たら、お前は幸福になれるだろう。右のこめかみに大きな痣あざのある男が、一人知っているばかりなのだが』と……」

（右のこめかみに痣のある男？ はてな？）と京一郎は首を傾かしげた。思いあたることがあ

ったからである。でも（まさか！）と思い返した。あんまり莫迦気ているからである。

しかし彼はこんなように思った。（この女が幸福になることならわしは何んでもしてやりたい）その時女の云う声が聞こえた。

「お父様の遺伝なのかもしれません、大船に乗って広い海へ、妾は行きたいのでございますの、好きなお方と！ わだかまりなく！」

京一郎がお蝶の家を出て、自分の家へ帰ったのは、それからしばらく経ってからであった。京一郎が出たのと引き違いのように、お蝶の家へはいつて来たのは二十八、九歳の威厳のある武士で、貴人のように高尚であった。駕籠に乗って来たのである。

「どうであつたか？」とその人は云つた。

「はい」とお蝶は微笑したが、「大体うまく参りました」

「歌を聞かせてやつたらうな」

「聞かせてやりましてございます」

「今度のことばかりは氣永に構え、そろそろとやらなければ成功しがたい。暴力や権威をもつてしても、齒の立つことではないのだからな」

「はい、さようでございますとも」

「直接本人にぶつかっても、口を割らない事件ではあるし」

「はい、さようでございますとも」

「それで傍流から手をつけたのが……」

こう云つて来て貴人のような武士は、まるあんどん 円行灯の黄味を帯びた光に、正しい輪郭を照らしていた顔を、にわかに傾かしげて聞き耳を立てたが、急に立ち上がると円窓を開けた。

窓の外は狭い坪つぼにわ庭であつて、石灯籠や八手やつでなどがあつた。その庭を囲んでいるものは、この種の妾宅にはつき物にしている船板の小高い塀であつた。

「これ、誰だ！」と武士は云つた。しかし坪庭には人はいなかつた。ただ横手の露路へ出られる、切り戸口の傍らに立っている、満開の桜の下枝から、花が散っているばかりであつた。

「どなたか？」と、お蝶が不安そうに訊いた。

「さあ、何んとなく気勢けいせいがしたが……」

この頃 オチフルイ 十二神貝十郎は、自分の妾宅へ寄ろうともせず紗を巻いたように霞んで見える、月夜の露路を本通りの方へ、考えながら歩いていった。

(館林様が関係しておられる、大きな仕事に相違ない)

本通りへ出てても人氣がなかった。夜が更けているからであつた。肩の辺に散っている桜の花弁を、手で払いながら貝十郎は歩いた。(京一郎という男は塩屋の倅だ。……昔の塩屋と来た日には、盛大もない家であつたが……)人氣がなくても春の夜は気分において賑やかであつた。猫のさかっている声などが聞こえた。

(あの歌? ……あんなもの、何んでもありやアしない。……しかしあの後を知ることが出来たら……)

(よし、俺は本流へぶつかつてやろう!)

「面白いな」と声に出して云つた。

「負けても勝つても面白い。大物を相手にして争うのだからな」

夜警の拍子木の音がした。

四

「ね。お母様。行かせてください。どうしたって行かなければならないのです」

京一郎は思い詰めた口調で、こうまともに母親へ云った。ここは本所安宅町の、掘割に近い一所に、大きい古く立っている、京一郎の家であった。その家の奥の座敷であった。更けた夜だのに五月幟が、風になびいている音が聞こえた。近くの家でうっかりして、取り入れるのを忘れたのであろう。

「京一郎やお前はどうしたのだよ、もうそんなことは云わないでおくれ。妾はそんなこと聞くだけでも厭だよ」

母親のお才は四十九歳であったが、勝れた美貌であるところから四十ぐらいにしか見えなかった。そう云ってから京一郎の顔を、当惑と不安と親の慈愛と、それらのものもこもった眼付きで、嘆願するように凝視した。（この子はお父様に大変似ている。思い立ったことなら、何んでもやり通す！ほんとにこの子は妾を棄てて家出をしてしまいはしないだろうか）お才は恐ろしくさえ思うのであった。

「ねえ京一郎や」とお才は続けた。「こんなこと妾が云い出しては、お前はバツを悪がるかもしれない。でも妾は云ってしまおう。誰かお前の背後にいて……そう、それも女がいる、お前に云わせるのではないかえ。そんなように妾には思われるがねえ……」

こう云われて京一郎は横を向いたが、顔がいくらか赧らんだようであった。でも彼が母

の方へ向いて、おめもせずこんなように云い出した時には、そういう赧らみはなくなっていた。

「ええお母様、そうなんですよ。女が背後うしろについております。その人が私へそう云わせるのです。でもそればかりではありません、たといその人が背後うしろにいたくとも、早晚私は同じようなことを、お母様に云い出したに相違ありません。ただ、あの方が私へ来たために、云い出すのが早くなつたばかりなのです。……だつてそうじゃありませんか。私達の家は何んていうのでしょうか。ガランとしていて寂しくて、陰惨としていて墓場のようなのです。その辺に沢山幽霊がいて、私達を見守つてもいるようです。大きな屋台骨、暗い間取り、荒れ果てた庭、煤けた階段、陽の目さえ通さないじゃありませんか。ここにじつとして坐つてみると、私は滅入つてしまひそうです。……いえそれよりもつとつと、大事なことがあるのです。それはお母様とお父様なのです。まあどうでしょうお父様と来ては、年が年中離座敷はなればかりにいて一度として主屋おもやへはいらつしやらない。一度として戸外へおいでにならない。庭へさえ出ないじゃありませんか。その上お母様や私をさえ、はいらせようとしないじゃありませんか。ええそうです離座敷はなれの中へ。……つまりお父様は狂人なのです。それもひどい人間嫌いの。ところでお母様はどうかというに、猫可愛がりに私

を可愛がつってお父様へ接近させまいとする。教えることは何かと云うに、じつとしておれ、穏しくしておれ、世間へ出るな、出世など願うな——と云うようなことばかりです。そうしてお母様はおつしやられる、二十五歳まで待つがよい。その時お前は金持ちになれると！……そういう私の家庭です。こういう家庭にじつとしていけば、青年としての活気が失われます。出て行かなければなりません。出て行って私は何かしたいのです」

「そういうことを云わせるのも、お前についている女だと思うよ。妾にはその女が憎くてならない」

「悪い女ではございません、お母様誤解してくださいませな」

——京一郎にとつてはお蝶という女は、悪い女ではないのであった。自分に勇気をつけてくれる、むしろ有難い女なのであった。その上その女は愛してくれた。

ああいうことからお蝶に逢い、これから後も来てくれと云われたので、京一郎は家を抜け出しては、お蝶の家へ忍んで行った。そのうち自分もいつとはなしに、お蝶に恋をするようになった。

「妾はあの夜お逢いしました時から、あなた様を愛しておりました」

「私もそうなのでございます」

とうとう互いに打ち明け合った。そうやって親しみを重ねて行くうちに、お蝶という女が覇気に富んでいて、京一郎と連れ立って、遠方へでも走って行ってしまおうと、心巧みをしているような、口吻こうぶんを洩らすようなことがあった。しまいには露骨に勧めるようになった。

「若い時期は早く過ぎて行くものです。享樂しようではありませんか。妾はいつでもお供をします。あなたには早く決心なされて、陰気な、無氣力な、生き甲斐のない、ご両親の家などお出なさいまし。外にはもつと華々しい、活気に充ちた生活があります。そうして男というものは、何か事業しごとをしないことには、男としての真の樂しみを、感じないものでございます。外にはいくらでも事業があります」

などというような意味のことを、率直に云ってそそのかしたりした。

五

京一郎は性格として、活動的の人間であつて、箱入り息子式に生活させられることを、ひそかに以前まえから嫌つていて、そのため両親へは内密に、町道場へ通って行き、竹刀しなの振

り方など習うほどであった。

で、愛するお蝶の口から、そんなように勧められると、一も二もなく家を出て外へ行き
たかった。でお蝶へ云うのであった。

「出ましよう、出ますとも、家を出ましよう！ お蝶様と一緒に行ってくださるか」

「行く段ではございません……でも」

と、すると、どうしたのか、ここで、いつもお蝶は言葉を濁し、暗示めいたことを云
うのであった。

「でも、世間へは手ぶらでは、出て行けるものではございません」

「手ぶらで！ 手ぶらとは？ 何んのことでしよう？」

「世間は薄情でございます。薄情の世間と戦うには、戦うだけの用意をしなくては……」

「いえ、私はこう見えても、体は強うございますから……」

「体も体でございます。……それより、何よりお金がないことには……」

「金！」「ええ」

「金なんか」「あつて？」

「いいえ。……でも、当座の……少しぐらいの金でしたら……」

「少しぐらいの当座の金などで……」ここで一層お蝶は暗示的に、このようなことを云うのであった。

「あの歌の後さえ解りましたら、金はなんぼでも出来るのですが。……あの歌の後を知っている者は右のこめかみに痣あざのある老人ばかりなのでございます」

「私の父の右のこめかみにも、痣があるのでございますよ。……でも私の父などが……」
「後の歌をお聞き出してくださいまし」

（変だな）と京一郎は思うのであった。

（父がそんな歌を知っているだろうか？）——とにかくこういう経緯が、幾度か繰り返されて昨夜となった。そうして昨夜もお蝶と逢った。するとお蝶は嘲笑あざわらうような、いつもとは異う口吻で、このような意味のことを云った。

「あなた様とは今晚限り、お逢いすることは出来ずまい」

「何故？」と京一郎は胆を冷やし、うわずった声で訊き返した。

「さあ、何故と申ししても……」

ここでお蝶は云いよじんだが、けつきよく京一郎が意気地いきぢがなくてお蝶の希望を叶わせ

ようとしな、で愛想を尽かしてしまつてお蝶一人でどこへとも行こう——そう決心をしたのであると、明瞭はつきりとではなかつたが云つた。

「ふーむ」と京一郎は考え込んだ。もうこの頃の京一郎は、お蝶がないことには一日として、生きて行かれないというほどにもお蝶に心を奪われていた。

で彼はカツとしてしまった。カツとした心で夢中のように誓つた。

「それでは必ず明晩にも……」

「そう」とお蝶は頷いて見せた。

「では妾は明日の晩には、あなた様のお家の裏口の辺でお待ちしていることにいたしましたよう」

その明日の晩が今となつた。

こうして母と話している間も、恋人が家の裏口にいるのだ——そういう気がかりが京一郎の心を、わくわくさせてならなかつた。

「お母様！」と京一郎は語気を強めて云つた。

「二十五歳になつた時に、私は大金持ちになれるのだとよくお母様は申しました。お母様お願いいたします。今、お金持ちにしてください！」

「京一郎や、まあお前は……」お才は声を顫ふるえさせて云った。

「そんなお前、勝手なことを！」

「ねえお母様、お金をくださいれ！」

「そういうことも背後うしろにいる女が……」

「ねえお母様、お金をくださいれ！」

六

例の歌についてお蝶の云った、あの言葉などは京一郎といえども、信ずることは出来なかつた。あの歌の後につづく歌を、聞き出すことが出来たなら、大金を得られるというような言葉は。……まして自分の父親などが、そんな歌を知っていようななどは、京一郎といえども信じなかつた。

で京一郎はそんな方面から、金を得ようとは思わなかつた。が、母親が口癖のように、お前が二十五歳になったら、大金持ちになることが出来ると、そう云つたのを知っていたので、その金を今手に入れようと、母親に迫っているのであつた。

「お母様お金をください！」京一郎はお才へ迫った。断乎とした執拗な、兇暴でさえもある、脅迫的の京一郎の態度と、顔色と声とはお才の心を、恐怖に導くに足るものがあつた。食いしばつた歯が唇から洩れ、横手に置いてある行灯の灯に、その一本の犬歯が光つた。頸に現われている静脈が、充血のためにふくらんでいる。膝に突いている両の拳の、何んと亢奮こうふんで顫えていることか！——京一郎はそういう姿で、お才へ迫って行くのであつた。

「京一郎や、まあお前は！」お才は思わず立ち上がった。

「まるで妾わたしを！……どうしようというのだよ！……」

「金だ！」と京一郎もつづいて立つた。

「今！　すぐにだ！　ねえお母様！」

「狂人きちがいだ！　お前は！……おお恐ろしい！　誰か来ておくれ、京一郎が妾を！」

——こんなことがあつてよいものだろうか！　母はその子に殺されるかのように、こう大声に助けを呼んで、縁から庭へ遁のがれようとした。

「お母様！」と追い縋なつた。

「誰か来ておくれ！」と障子をひらいた。

「逃げますか！ お母様！ コ、こんなに……頼んでも頼んでも頼んでも！」

よーし！ と猛然と追い迫った時、自然にまかせて生い茂らせ、長年手入れをしなかつたため、荒れた林さながらに見える、庭木の彼方あなたに立っている、これはそういう林の中の、廃屋さながらの建物の中から、老人の歌声が響いて来た。

かすかに見ゆる

やまのみね

はれているさえなつかしし

舟のりをする身のならい

死ぬることこそ多ければ

さて漕ぎいだすわが舟の

しだいに遠くなるにつれ

山の裾辺の麦の小田

いまを季節とみのれるが

苟りいる人もなつかしし

わが乗る舟の行くにつれ

舟足かろきためからか

わが乗る舟の行くにつれ

色も姿もおちかたの

深き霞にとぎされぬ

われらの舟路！ われらの舟路！

つれてバラードの楽の音が聞こえた。

「あッ！」とその刹那京一郎は、縁に突つ立つて動こうともせず、首を伸ばして聞き澄ました。

七

(幽暗なる世界なるかな

まにもの
蟲物めきしたたずまいなるかな

ここにある物は「現在」の頹廢、ここにある物は過去への思慕、ここに住める物は生ける亡靈、この部屋へ入る者は襲わるべし）

こういう箴言しんげんが壁の一所に、掲げられていなければ不似合いである。——と、そんなように思われるほど、この部屋は陰気で悲し気で、他界的で気味が悪かった。

京一郎の父で塩屋の主、お才の良人おっとの嘉右衛門が、十数年来孤独に住んでいる、庭の奥の林の中の、廃屋の中の部屋であった。万国地図と海図との懸かった、一方の壁へ背を向けて、背革紫檀の古風で寛濶な、肘掛椅子に腰をかけ、嘉右衛門はバラードを弾いている。六十歳ぐらいの年齢としでもあろうか、頭髮は晒らした麻のように白く、頸うなじにかかるまで長かったが、もう一度世に出る機会が来た時、穢れていては恥であると、そんなように思った心持ちからか、丁寧ていねいに手入れされていた。

鋭い眼、食いしばったような口、大資本家型の猶太鼻ユダヤ、嘉右衛門はそういう顔をしているが、右のこめかみに拇指おやゆび大の痣あざが紫がかつた黒い色に、気味悪く染め出されているために、不吉な人相をなしていた。長身であり肥大であった。で体格は立派なのであった。

そういう彼と向かい合って、同じような椅子に腰をかけている、三十五、六歳の武士が

あつたが、他ならぬ オチフルイ 十二神貝十郎であつた。

その二人を取り巻いて、床の上や壁の面に、雑然と掛けられ置かれてある品の、何んと異様であることか。望遠鏡があり帆綱があり、羅針盤がありか権があり、拳銃があり洋刀があり、異国船の模型があり、黄色く色づいている龍骨があり、地球儀があり、ウエルガラス 天気驗器があり、ドンクルガラス 写真器がありホクトメートルがあつた。

壁に添つてハンモックが釣るされてあつたが、そこには、人間が寝ていずに、オランダ 和蘭あたりの船長でも着そうな、洋服が丸めて置いてあつた。

が、そういう品々は、十数年間人の手によつて、手入れをされたことがないと見え、さ 錆び、よごれ、千切れ、こわれ、ちりほこり 塵埃にさえも積もられていた。しかしそれよりもそういう品々やそういう人々を包んでいる、部屋の内部の構造の、何んと不思議であることか。天井は黒く塗られている。壁も黒く塗られている。柱も黒く塗られている。壁にあるのは円形の窓で、天井にあるのはこれも円形の、はり 玻璃で造られた明り窓で、そこにあか 灯火が置いてあると見え、そこから鈍い琥珀色の光が、部屋を下様に照らしていた。それにしても天井がかまぼこ 蒲鉾形に垂れ、それにしても四方の黒い壁が、太鼓の胴のそのように、中窪みに窪んでいるというのは、いったいどうしたことなのであろう？ こういう構造はヨーロッパ 欧羅

巴^バあたりの、商船のサロンの構造^{つくり}ではないか。……まさに、それはそうであった。商船のサロンに則^{のつと}つてつくった、部屋に相違なかつた。

思うに嘉右衛門が十数年前、この部屋へ世を避けてこもった時、考えるところあつてこういう部屋をひそかに造つたものと見える。

われらが舟路！ われらが舟路！

最後の歌が終つても、尚バラードは鳴つていた。眼を閉じ追想にふけりながら、嘉右衛門が弾いているからであつた。

その嘉右衛門の顔の上に、天井から光が射して、額を明るく照らしていた。顔を上に向けているからである。閉ざされた眼の下^{したまぶた} 瞼^{まぶた}の辺に——眼窩が老年で窪んでいるのでかなり濃い陰影がついていて、それが彼の顔を深刻にしていたが、尚その後をうたいつづけようとして、なかば開けた唇を、幽^{かす}かに顫^{ふる}わせている様子と、頬に青年のような血の色が、華やかに注^さしている様子が、亢奮と感激と思慕と憧憬とに、充たされた顔をなしていた。

(さあもう一息だ！ 一息でいい！ もう一息で秘密は解けるだろう)

向かい合つて腰かけて嘉右衛門の顔を、熱心に見詰めていた貝十郎は喜びをもつてこう

思つた。

(よし、もう一息駆り立ててやろう)で、彼はそののかすように云つた。

「空にまで届く大龍巻、丘のように浮かぶ大鯨。鰯の大軍を追つかけて、血の波を上げる鯨の群れ、海の出来事は総て大きい！ 赤い帆が見える！ 海賊船だ！ 黒い船体が島陰から出た！ 真鍮の金具、五重の櫓、狭間作りの鉄砲櫓！ 密貿易の親船だ！ 麝香、樟腦、剛玉、緑柱石、煙硝、麝香木、没薬、更紗、毛革、毒草、劇薬、珊瑚、土耳古玉、由縁ある宝冠、貿易の品々が積んである！ さあ、日が落ちた、港へはいれ！ 黎明が来たぞ、島へ隠れる！ ……大金がはいった、さあ上陸だ！ 酒場、踊り場、寝台のある旅舎！ どれでも選べ、女を漁れ！ 飲め、酒だ、歌え！ それよりもだ、バラードを鳴らして！」

絶えようとしていたバラードの音が、この時活気を呈して来た。そうして嘉右衛門の見開かれた眼に、燦のような光が燃えて来た。

(歌うぞ?)と貝十郎は首を伸ばした。

(いよいよあの歌の次を歌うぞ!)亢奮せざるを得なかった。

当然と云つてよいのである。彼はその歌を聞きたいがために、この夜ごろこの部屋へ入

り込んで来て、なかば放心しなかば狂気し、しかも再び密貿易商として、海外へ雄飛しようとする夢を執念深く夢見していて、そのために気むずかしくなっており、そのために尊大になつており、あつかい悪くなつてゐる、塩屋の主人の嘉右衛門を、すかしたりなだめたりおだてたりして、そうして絶えず亢奮させ、そうして絶えず昔を思い出させ、昔歌つたあの歌のつづきを、歌わせようと苦心をした、その苦心が報いられようとするのであるから。

（歌うぞ！）と貝十郎は耳を澄ました。（あの歌に秘めてある秘密などは、暗号というものの性質を、少しでも知っている人間にとつては何んでもなく解ける種類の秘密だ。一句一句の頭文字と、一句一句の末の文字とを、つなぎ合わせればそれで解ける秘密だ。最初の一句の頭文字は「か」という文字に他ならない。その次の句の末の末字は「ね」という文字に他ならない。こうしてつないで行くことによって、秘密は解けてしまうのだ。そうして俺は秘密を解いた。が、あれだけでは仕方がない。そうさ、「金は石の下、石は川の縁」と云つたところで、その川がどこの川だやら、その縁がどこの川のどの辺の縁やら、解らないことには仕方がない。それを説明しているのが、後へ続く歌なのだ）

（歌うぞ！）と貝十郎は耳を澄ました。（後へ続くその歌を！）

はたして嘉右衛門は歌い出した。

.....

.....

しかし言葉をなさない前に、にわかに歌うのを止めてしまい、顔を窓の方へやったかと思うと、

「おのれ
汝ら、秘密を盗みに来たか！」

こう叫んで立ち上がった。が、その次の瞬間には、腐った木のように床の上に仆れた。

ぎよつとしてこれも立ち上がり、貝十郎は窓の方を見た。彼の眼に映ったものといえば、この家の伴の京一郎の顔と、お蝶のその実はこの時代の盗賊、六人男といわれている賊の、その中の一人の女勘助の、妖艶をきわめた顔であった。

「馬鹿め！ あつたら大事なところを！」

貝十郎は残念そうに叫び、身をかがめて嘉右衛門の手を取った。が、その手には脈みやくがなかった。激情が彼を殺したのである。

後日、貝十郎は人に語った。

「嘉右衛門は本来密貿易商として、刑殺さるべき人間なのでしたが、財産を田沼侯へ差し上げたので、命ばかりは助けられたのでした。全財産を献じたと云つても、それは実は表向きで、彼は以前から大きな財産を、ひそかに隠して持つていて、その隠し場所を歌へ詠み込み、機嫌のよい時に一人で歌つて、楽しんでいたということです。そうして女房だけへは云つたそうです。『京一郎が二十五にでもなり、俺の事が官から忘れられた頃、その財産を取り出して、昔のような豪快な、海の上の生活をやることにしよう』と。……そういう秘密の歌のことを、どうして館林様が知つたものか——ああいう叡智えいちのお方だから、どこからかお知りなされたのであろう。——秘密の歌の前半まで知つて、後へつづく歌を知らうとなされた。と云つて嘉右衛門に強いて訊いても、剛愎の嘉右衛門が話すわけはない。俵の京一郎から訊かせたら、親子の情で話すだろう。……そこで手下の六人男と謀り、京一郎を玉にしたのでした。……あの時の喧嘩はカラクリなのでした。お蝶——女勘助の家へ——あの家は彼らの巣だつたのでした。……逃げ込ませようためのカラクリだったのでした。それからの事はお話しなくとも推量する事が出来ましよう」

木曾の旧家

「あれーッ」

と女の悲鳴が聞こえた。貝十郎は走って行った。森の中で若い美しい娘が、二、三人の男に襲われていた。しかし貝十郎の姿を見ると、その男達は逃げてしまった。

「娘ご、どうかな、怪我はなかったかな」

「はい、ありがとうございます。おかげをもちまして」

「それはよかった。家はどこかな、送って進ぜる、云うがよい」

「はい、ありがとうございます。すぐ隣り村でございまして、征矢野そやのと申しますのが妾の家わたしで……あれ、ちようど、家の者が……喜三や、ほんとに、何をしていたのだよ……」

「お嬢様、申しわけございません。道で知人しりあいに逢いましたな」

手代風の若者が小走って来た。こういう事件のあったのは明和二年のことであって、所は木曾の福島であった。

その翌日のことである。

「どなたか！ あれーッ、お助けください！」

若い女の声でした。で、貝十郎は走って行った。駕籠かご昇かきが娘を駕籠へ乗せて、今やさらって行こうとしていた。

「こいつら！」と貝十郎は一喝した。駕籠昇きが逃げてしまった後で、貝十郎は女を見た。

「や、昨日の娘ごではないか」

「まあ」と娘も驚いたようであった。「あぶないところを重ね重ね」

「それはこつちでも云うことだが……」

「あれ、幸い家の者が……」

三十五、六歳の乳母らしい女が、息をはずませて走って来た。

「お三保様、申しわけございません」

その翌日のことであった。木曾川の岸で悲鳴がした。

(ひよっとするとあの女だぞ)

思ひはしたが貝十郎は、声のする方へ走つて行つた。筏いかだし師らしい荒々しい男が、お三保を筏へ引きずり込み、急流を下へ流そうとしていた。しかし貝十郎の走つて来るのを見ると、筏師と筏とは川下へ逃げた。「娘ご、これで三度だな」「重ね重ね、ほんとうにまあ……」「隣り村はなんとという村だ?」「駒ヶ根村でございます。……爺や、お前、何をしていたのだよ」「はいはいお嬢様、申しわけもない……」

六十近い下僕しもべらしい男が、汗を拭き拭き走つて来た。

(あれ、幸い、家の者が——と云う段取りになつたという訳か) 貝十郎は思ひ思ひ別れた。(俺を釣ろうとの計画とも見えれば、連続的偶然の出来事とも見える) 旅籠屋ますや舁屋へ帰つてからも、貝十郎は考え込んだ。

(よし、面白い、探つて見よう) で、翌日駒ヶ根村へ出かけた。

用があつて木曾へ来たのではなかつた。風流から木曾へ来たのであつた。よい木曾の風景と、よい木曾の名所旧蹟と、よい木曾の人情とに触れようために来たのであつた。

与力とは云つても貝十郎は、この時代の江戸の名物男であり、伊達男ダンデーであり、風流児であり、町奉行の依田和泉守などとは、そういう点で憚りはばかのない、友人交際つきあいをしていたので、そういうわがままは大目に見られていた。

上松の宿まで来た時である。貝十郎は茶店へ休んだ。

「征矢野という家がこの辺にあるかな？」

茶店の婆さんへ何気なく訊いた。

「へい、いくらでもございますだ」

「ナニ、一軒で沢山なのだが、美しい娘のある家だ」

「木曾は美人の名所でごわしてな」

「有難う」と貝十郎は笑って受けた。「婆さんなんかもその一人だね」

「へい、御意ぎよで、三十年前には」

「三十年前の別嬪については、いずれ詮索をするとして、三保という娘のいる家だが……」

「あれ、お三保お嬢様のお家ですか」

「さよう。お前の親戚かな」

「とんでもねえ」と婆さんは撥ねた。「勿体もねえご旧家様でござす」

「そのご旧家様、どこにあるかな？」

旧家であつて財産家ではあつたが、主人も主婦も死んでしまい、娘一人が生き残り、主人の弟の隼はや二郎という男が、後見人として入り込んでいる。上松の宿から三里あまり、山の方へはいつた鷺ノ森という地点に、宏大な屋敷が立っている。——と云うのが茶店の老婆の話した、征矢野という家の輪廓であつた。

(もうこれだけでも犯罪の起こる、立派な条件が具備されている) 鷺ノ森の方へ歩きながら、貝十郎はそんなように思った。

(隼二郎という男が悪人で、征矢野という家を横領しようとする。後継者の娘が邪魔になる。悪漢わるものに云いつけてお三保という娘を、傷者きずものにするか誘拐かどわかさせる。……平凡に考えてもこんなような、犯罪の筋道はちやんと立つ) 貝十郎は歩いて行つた。

木曾の五木と称されている、杜松ねずや羅漢柏あすなろや榎さわらや落葉松からまつや檜ひのきなどが左右に茂っている。山腹の細道は歩きにくく、それに夕暮れでもあつたので、気味悪くさえ思われた。空を仰いでも左右から差し出した木々の枝葉に蔽われて、夕焼けた細い空が帯のように覗かれて見えるばかりであつた。足にまつわる草や蔓には、露があつて脚絆きやはんを冷たく濡らした。

かなり歩いたと思つた時、行く手の灌木の向こうから、若い男女の話し声が聞こえた。

「ね、いいじゃありませんか。……いつまで待てとおっしゃるのでしよう。……」

「いいえ、いけませんの、どうぞ勘忍して。……妾^{わたし}、辛いのでございますわ。……だって、

叔父様が……ね、ですから……」

「叔父様が何んです！ そんなもの！ ……ああ私はどうしたらいいのだ！ ……もう待

てないのです、とても私には！ ……若さだって過ぎてしまいます！ ……逃げましょう、

いつそ、ね、二人で！ ……」

（ははあ）と貝十郎は微笑した。（野の媾^{あいびぎ}曳^ひつていうやつだな。度を越すと野合という奴

になる。……）

「三保子！」と突然荒々しい、男の声が聞こえて来た。「何をしている。家へ帰れ！」

「あれ、叔父様、まあどうしよう！ ……鏡太郎さん早く逃げて！」

鏡太郎の逃げる足音が聞こえた。

（やれやれ）と貝十郎は苦笑をした。（叔父さんという奴は大概の場合、粹な人間に出来

ているものだが、この叔父様は逆だったわい。待て待て、三保子と呼んだようだった。

では女はお三保なのか、とすると叔父と云うのは後見をしている、隼二郎という男だな。

隼二郎叔父さんを見てやろう）

で、貝十郎は灌木を巡り、横手の方から前の方を見た。紅い帯を結んだ初々しいお三保の姿——背後姿うしろが見え、その前に立っている瘦躯長身の、四十年輩の男の姿が見えた。蒼白い顔色、黒い鬚鬚が、陰険の相をなしていた。落ち窪んだ眼窩の奥の方で、瞳がチロチロ光っていたが、それも人相を深刻にしていた。

(これは大変な怪物だぞ) 貝十郎は眉をひそめた。(俺に取っても強敵らしいぞ) 隼はや二郎はお三保に何か云っていた。しかしきわめて低声だったので、貝十郎へは聞こえなかった。と、二人は歩き出した。そうして間もなく見えなくなった。

行く手に小広い野があつて、丘がいくつか連らなっていたが、その丘の向こうに征矢野そやのの屋敷が、どうやら立っているようであつた。

(さて、これからどうしたものだ) 貝十郎は思案した。

(とにかく征矢野家まで行つて見ることにしよう) しかし十歩とは歩かなかつた。

「もし、お武家様、お待ちなすつて」こう背後うしろから呼ばれたからである。振り返つた貝十郎の眼の前にいたのは、二十四、五歳の若い男であつた。

「何か用かな」と貝十郎は訊いた。

「へい」と若い男はニヤニヤ笑つた。「あの娘、別嬪べっぴんでございませうがな」

(厭な奴だな)と貝十郎は思った。で、黙って男を見詰めた。

「三保子様は別嬪でございますとも」自信がありそうに若い男は云った。「云わば花野の女王様で」

(こいつ馬鹿だ!)と貝十郎は思った。(でなかつたら色情狂だ)

「それに大層もない財産家で」

(おや、こいつ、慾も深いぞ)貝十郎は降参してしまった。

(山の中へ来ると変な奴に逢うぞ)

「お武家様、あなた見ていましたね」

三

「何を？」と貝十郎は不愉快そうに訊いた。

「私と三保子様との恋三昧をでさあ」

「……………」

「旦那、邪魔をしちやアいけませんぜ」

「貴様は誰だ！」

「鏡太郎って者だ！」

（ふうん、こいつが鏡太郎なのか）改めて貝十郎は鏡太郎を見た。

ベロツとした顔、ベロツとした姿、——そういう形容詞が許されるなら、鏡太郎はそういう顔と姿の、持ち主と云わなければならなかった。つまり嘗めたような人間なのであった。嘗めたように額がテカテカしており、嘗めたように頤がテカテカしていた。衣裳などでもテカテカ光っていた。都会の軟派の不良青年——と云ったような仁態であった。しかし太々しい根性は、部厚の頬や三白眼の眼に争い難く現われていた。

（ははあこいつ色悪だな）と貝十郎はすぐに思った。（こいつに比べると隼二郎の方が、まだしも感じがいいと云える。——どっちがいったい悪党なんだろう？ ちよつと見当がつかなくなった。江戸にいると俺は見透しなんだが、田舎へ来るとそういかなくなる。田舎は性に合わないに見えるぞ）

「旦那」と鏡太郎が嘲笑うように云った。「ただのお武家さんじゃアなさそうですね。それにお前さんあの女に、特別の興味を持ったようですね。が、ハツキリ云って置く、手を引いた方がようござんしよう。……鷺ノ森へ来たお前さんだ、征矢野の家のお客なんだ

ろうが、あの女へチョツカイは出さない方がいい」

「うるさい下司げすだな、何を云うか！」

「何を、篋べらぼう棒、怖いものか」

「行け！」

「勝手だ」

「白痴たわけもの者め」

云いすてて貝十郎は先へ進んだ。

（まるで俺の方が脅されたようなものだ）苦笑せざるを得なかった。（幸先必ずしもよくないぞ）

その時彼の背後うしろの方から鼻ふくろの啼なきき声が聞こえて来た。つづいて雉きじの啼なきき声がした。呼び合い答え合っているようである。

（これはおかしい）と思ひながら、貝十郎は振り返つて見た。灌木の傍らに男女がいた。

一人は例の鏡太郎であり、もう一人は見知らない女であつて、鬚ひとこの所ところが夕日を受けて、白く光っているのが見えた。

征矢野家の客間は賑わっていた。大勢の客がいるのである。その中に貝十郎もいた。

「これはようこそおいでくださいました。ずっとお通りくださいますよう。主人も喜ぶでございましょう。皆様お集まりでございませう」

宏大な征矢野家の表門まで、貝十郎が行きつくや否や、袴羽織の家人が出て来て、こう云って貝十郎を案内しようとした。

「いや、拙者は、何も当家に。……単にこの辺へ参つたもので……」

当惑して貝十郎はこう云つたが、家人は耳にも入れなかつた。待つていた客を迎えるようにして、貝十郎を客間へ通した。

その客間には貝十郎よりも先に、大勢の客が集まつていたし、貝十郎の後から、幾人かの客が、招じられてはいつて来た。

征矢野家の客間は賑わつていた。

(これまでのところ俺の負けだ) 貝十郎はキョトンとした心で、むしろ憂鬱と不安を抱いて、柱へ背をもたせ座布団を敷き、出された酒肴へ手をつけようともせず、彼の左右で雑談している、人々の話をぼんやりと聞き、その合間にそんなことを思った。(これまでのところ俺の負けだ。何から何まで意表に出られる)

「ともかくも先代は人物でしたよ」

修験者らしい老人が、盃を口から離しながら、隣席となりの商人らしい男に云った。「衰微していた征矢野家を、一時に隆盛にしたのですからな。修験道から云う時は『狐狗狸変様蒐珍宝』——と云うことになりますので」

「さようで」と商人はすぐに応じた。「商法の道から申しますと、十ばい買った米の相場が、一夜で十倍に飛び上がったようなもので」

するとその隣りに坐りながら、いいかげんに酔っているところから、相手があつたら言葉尻でも取つて、食つてかかろうと構えている、博あそび徒びにんらしい若者がいたが、

「一時に金持ちになるような奴に、善人なんかありませんや。その証拠にはこの先代だつて、あんな死に態さまをしてしまった。罪ほろぼしというところで、毎年命日がやって来ると、当代の主人がこんなように諸人接待のご馳走をするが、それだけ引け目があるつて訳さね」

(そうか)と貝十郎は胸に落ちた。(諸人接待の饗応だったのか。それで俺のような人間をも、有無を云わせず連れ込んだのか。……それはそれとしてこの家の先代には、何か犯罪があるらしいな)

で、貝十郎は聞き耳を立てて、客人達の話聞いた。

「一人の老人の旅の者が、何んでもこの家へ泊まったのだそうです」貝十郎のすぐ側そばに坐まつて、着さかなをせせていた村医者らしい、七十近い老人が、声をひそめて他聞を憚るらしく、自分の前に坐っている、これも六十を過ぎたらしい、寺子屋の師匠とでも云いたげの、品のある老人へ囁いた。「ところがそれつきり旅の者は、この家から姿を隠したそうで、つまりこの家から出ても行かず、またこの家におりもせず、消えてなくなったのだということだ」

「さよう私もそんな話を、たしか若い頃に聞きましたっけ。その時以来この征矢野家は、隆盛に向かったということですね」寺子屋の師匠は相槌を打った。「ところがその後ずつと後になって、ごろつきのような人間が、この征矢野家へやって来て、先代を強請ゆすったということですね」

「さようさようそうだそうです。親父おやじを生かして返してくれ、それが出来なかつたら財産

を渡せ——こう云つて強請ゆすつたということだ

「ところがその男もいつの間にか、姿が失なくなつてしまつたそうで」

「そこで私はこう思いますので」村医者らしい老人は云つた。

「ここの屋敷を掘り返したら、浮ばれない無縁の二つの仏が、白骨となつて現われようかね」

「まさにね」と寺子屋の師匠が云つた。「と思うとここにあるご馳走なども、血生臭くて食えませんよ」

「先代が裏庭の松の木の枝で、首を縊つて死んでいたのを、私は検屍をしたのですが、厭な気持ちがいちましたよ」

「私は現在ここの娘の、お三保さんに読よみ書を教えているのですが、どうも性質が陰気ですな」

(なるほど)と貝十郎はまた思つた。(そういう事件があつたのか。ここの先代は悪人なのかもしれない)

(しかし)と貝十郎はすぐに思つた。(田舎の旧家というような物には、荒唐無稽で出鱈目な事が、伝説のような形を取つて、云いつたえられているものだから、そのまま信用す

ることは出来ない)

——それにしても主人の隼二郎も、娘のお三保と接待の席へ、何故姿を見せないのだろう？ このことが貝十郎を不思議がらせた。

袴羽織の召使いや、晴衣をまとった侍女などが、出たりはいったりして酒や馳走を、次から次と持ち運び、酌をしたり世辞を振り蒔いたりしたが、隼二郎とお三保とは出て来なかつた。燭台が諸所に置かれてあり、その光が襖や屏風の、名画や名筆を華やかに照らし、この家の豪奢ぶりを示していた。

客の種類は雑多であつた。村の者もいれば隣村の者もあり、通りがかりの旅人もいれば、接待の噂を聞き込んで、馳走にあずかりに来たものもあつた。僧侶の隣りに浪人者がいたり、樵夫きこりの横に馬子がいたりした。

「お武家様おすごしなさりませ。わたくし妾、お酌いたしましょう」不意に横から云うものがあつた。

「うむ」と貝十郎はそつちを見た。

いつの間にそこへ来ていたものか、山深い木曾の土地などでは、とうてい見ることの出来ないような、洗い上げた婀娜あだな二十五、六の女が、銚子を持って坐つていた。三白眼だ

けは傷であつたが、富士額の細面、それでいて頬肉の豊かの顔、唇など艶があつてとけさうである。坐っている腰から股のあたりへかけて、ねばっこいうね蜒りがうね蜒つていて、それだけでも男をうっとり恍惚させた。

「これは……」と貝十郎は思わず云つたが、釣り込まれて盃を前へ出した。

「はい」と女は上手に注いだ。

キユツと飲んで置こうとするところを、

「お見事。……どうぞ、お重ねなすつて」

云い云い女は片頬で笑い、上眼を使って流すように見た。

「では……」「はい」

「これはどうも」「駈け付け三杯、もうお一つ」「さようか」「さあさあ」「ごぼれまし
たぞ」

「これは失礼。……ではその分を……」「え？」

「いいえさ、今度こそ上手に、ホ、ホ、散らぬようお注ぎいたします」

「うーん、どうもな、大変な女だ」

「まあ失礼な、お口の悪い」

「いやはや、ご免、地金が出ました」

「今度は罰金でございます」

「と云うところでもう一つか」

「それもさ、今度は大きい器うつわで」

「これは敵かなわぬ」「敵わぬついでに」

「降参でござる。もういけない」

「では妾わたくしが助太刀と出しましょう」

「おお飲まれるか、これは面白い。……さあさあ拙者が注ぎの番か」

「はい、ご返盃」「あい、合点」

「ねえお武家様」と女は云った。「江戸のお方でございましょうね」

「ナーニ、奥州は宮城野の産だ。……そなたこそ江戸の産まれであろうな」

「房州網代村の産でござんす。……ご免遊ばせ」

とスツと立ち、向こう側の座席へ行ってしまった。

(驚いたなあ)と貝十郎は、胸へ腕を組んで考えた。(どういう素姓の女だろう? ……
それにしてもすっかり酔わされたぞ)その時寺子屋の師匠の声が出た。

「お豊、あの女が曲者でしてな」

「さようぞ」と村医者の声が出た。「隼二郎殿もお蔭で痩せましようよ」

こうして接待は深夜まで続いた。その間に土地の人達は、次々に辞して家へ帰り、旅の者だけが希望のぞみに委せて、別々の座敷で寝ることになった。

貝十郎の案内された部屋は、十畳敷きぐらいの部屋であって、絹布の夜具が敷かれてあり、酔ぎめの水などが用意されてあった。

(さて、これからどうしたものか)貝十郎は布団の上へ坐り、ぼんやり行燈を眺めやった。したたかに彼は飲まされたので、酔がすっかり廻っていた。(何んにもなすことはないじやアないか。フラーとやって来てご馳走になつて、いい気持ちに酔つたのだからな。このままグツスリ眠つてしまつて、翌日になつたら顔を洗い、有難うござんしたとお礼を云つて、帰つてしまつたらいいじやアないか)彼はこんなことを思い出した。(何も征矢野家の犯罪つて奴を、あばき出そうために来たのじやアない。たかだか酔狂な好奇心から、様

子を探るために来たまでだ。探る必要はあるまいよ）トロンとした心でこんなことを思った。（叩いた日にはどんなものからだって、罪悪という埃は立つき。こういう俺だってひつ叩かれて見ろ、そりやア目茶苦茶に埃は立つ）ここまで考えて来ておかしくなった。

（二百石取りの与力の俺がさ、蔵前の札差しと対等に、吉原で花魁おいらんが買えるんだからな。不思議と云わなければならないよ。そういう贅沢がどうして出来る？ と、齒ぎしりをし、て問い詰められて見ろ、ダーとなつて引つ込んでしまわなければならない）

そこで寝てしまおうと帯を解きはじめた。その時どこからともなく、雉きじの啼き声が聞こえて来た。すぐに続いて梟の啼き声が、——こんな深夜なのにそれに答えて、どこからともなく聞こえて来た。

（いけない）と貝十郎は帯を解く手を止め、その手で大小を手たばさんだ。与力としての良心が、にわかに関めいたからである。襖をあけて廊下へ出た。しかしすぐによるめいた。

（はてな、悪酔いをしたらしいぞ）

ヒヨロヒヨロヒヨロヒヨロと先へ進んだ。

六

廊下の片側が雨戸になつていて、その一枚が開いていたので、そこから裏庭へ出て行つた時にも、貝十郎の酔は醒めていなかった。

遅い月が出て植え込みの葉が、いぶし銀のように光っている蔭から、男女の話し声が聞こえて来た時には、しかし貝十郎も耳を澄ました。

「おい豊ちゃんどうなんだい」

「鏡ちゃん、駄目だよ、まだなんだよ」

「駄目、へえ、どうして駄目なんで？」

「あの人どうにも固いのでね」

「何んだい、豊ちゃん、意気地いけじがないなあ」

「鏡ちゃんだつて意気地がないよ。二度も三度も縮尻しくじつたじゃアないか」

「邪魔がそのつど出やがるのでね。それもさいつも同じ奴が。江戸者らしい侍なんだよ」

「江戸者らしい侍といえ、妾もそういうお侍さんへ、酒を飲ませて酔いつぶしてやった

「よ」

「邪魔の奴はつぶしてしまおうがいいなあ。……でないといい目が見られないからなあ。……
 ……豊ちゃんおいと俺らおいとのいい目がさ」

「そうとも」と女の声がかつた。愛を含んだ声であつた。

「そうとも二人のいい目がねえ。……妾わたしアお前さんが可愛くてならない」

それつきり、声は絶えてしまった。

(オーヤ、オーヤ)と貝十郎は思った。(ここでも媾あいびき曳が行われている。悪党同士の媾あいびき曳だ。鏡太郎とそうしてお豊とらしい)(悪くないな)としかし思った。(罪悪のあるらしい旧家の裏庭で、美貌の若者と美貌の女とが、月光に浸りながら媾あいびき曳をしている。詩じやアないか！ 詩じやアないか！ そいつを与力が立ち聞きしている。詩じやアないか！ 詩じやアないか！ ……厭だよ、こんないい光景を「御用だ！」などという野暮な声を出して、あつたらぶち壊してしまうのは。……こつそり逃げて帰ってやろう)

酔がさせる業であつた。与力の方から逃げ出したのである。

彼は家へははいらなかつた。庭を巡つてどこまでも歩いた。

宏大な建物を圍い繞ようして、林のようにこんもりと、植え込みが茂っている庭であり、諸所に築山や泉水や、石橋などが出来ており、隔ての生垣には枝折戸しおりどなどがあつたが、鍵な

どはかかつてはいなかった。幾個かの別棟の建物があり、厩舎らしい建物も、物置きらしい建物も、沢山の夫婦者の作男達のための、長屋らしい建物もあった。夜が更けているところから、どの建物からも灯火あかりは射さず、人の声も聞こえなかった。厩舎の前まで行った時、ませ棒を蹴っていた白い馬が、人なつかしように首を伸ばし、太い鼻息をして貝十郎を迎えた。横射しに射していた月光が、その長い顔をいよいよ長く見せた。

貝十郎は彷徨さまよって行った。と、行く手に建物があり、そこから灯火が射していた。主屋と五間ほど離れた所に、独立して建ててある建物であつて、二間か三間かそれくらいの座敷を、含んでいる程度の大きさであり、主屋とは幾個かの飛び石をもって、簡単に連絡さされていた。風変わりの建物でもなかったが、頑丈にしかして用心堅固に、造られているように見て取られた。三方厚い壁であり、その壁々には明りどりの、鉄格子をはめた窓ばかりが、わずかについているばかりであつた。主屋おもやに向いた方角に、出入り口がついていた。土蔵づくりの建物なのである。燈火は出入り口から射していた。戸をとぎすのを忘れたからであろう。射している光もほんの幽かすかで、他の幾棟かの建物から、同じように光が射していたら、紛れて気づかれないほどであつた。

貝十郎はそつちへ進んだ。入り口の前まで歩いて行った時、彼は女の泣き声と、そうし

て男の叱る声とを、その建物の中から聞いた。

（オーヤ、オーヤ）と彼は思った。（ここでは女が虐められている。反対側のあっちの庭では、男と女とが愛撫し合っていたが）

彼はしたたかに酔っていた。そうして彼は与力であった。与力としての精神と、酔漢としての戯心たわむれごころとで、彼は真相を知ろうと思った。

で、足音を忍ばせて、建物の中へはいって行った。泣きながら女の喋舌しゃべる声が、すぐ彼へ聞こえて来た。

「妾わたし、もうもう待てません。……これではまるで嬖殺なぶしです。……今夜こそ……どうしたって……でなからうものなら……」

男の叱る声が聞こえた。

「ね、あっちへ行っておいで。……お前の心は解っているよ。……が、しかしそう性急には……物事にはすべて順序がある。あの……娘こを……ね、三保の方を……三保は年頃になつて居るのだから。……それに私わたしには仕事がある。……これもどうしたって仕上げなければならぬ。……だからこそ私わたしはこんな所へ……ああそうだよ。こんな所へこもって……」

泣きながら反対する女の声がした。

「ですから三保子様を早くどなたかへ。……鏡太郎さんというあの人へでも。……お仕事！ ああ、そのお仕事です！ どんなに妾はそのお仕事を、憎んで憎んでおりますことか！ ……そのためあなたは人相までも、変わってしまったではありませんか！ ……二つの骸骨！ 壊してしまおうかしら！」

「これ、お豊！ 何を云うのだ！」

「旦那様！ いいえ隼二郎様」

「お豊、私はお前を愛している。……ね、それだけは信じておくれ」

「妾も、ええ妾もですの」二人の声はここで切れた。

（さて）と貝十郎は苦笑して思った。（この後は抱擁ということになるのさ）

彼の足下には二尺幅ぐらいの、狭い廊下が左右に延び、同じぐらいの狭い廊下が、前方へ向かっても延びていた。丁字形になっている廊下の中央に、彼は佇んでいるのであった。その前方に延びている廊下の、右側に大きな部屋があり、部屋の扉が開いているので、燈火と人声とが洩れて来るのであった。数歩進んで扉の口まで行き、そこから内を覗いたなら、内の様子は見えるのであった。内部の一部——床の端だけは、ここにいる貝十郎にも見て取れた。畳が敷いてないのである。板張りになっているのである。

(お豊とそうして隼二郎なのか。……いや、腕の凄い女ではある。あっちの庭では年の下の、美少年と媾曳をしたかと思うと、こっちの部屋では年の上の、金持ちの旦那を口説いている、同じ晩にさ、わずかの時間にさ。……あんな女は都会にも少ない。どうにも俺は田舎が嫌いだ)

七

この時隼二郎の声が聞こえた。

「杉田玄伯殿、前野良沢殿、あの人達と約束したのだよ、私の方が早く仕とげて見せると。……江戸でああいう人達と一緒に、研究していた頃は面白かった。……後見人となってこの家へ入り、木曾山中のこんな所で、くらしをするようになってから、私には面白い日がなくなってしまった。……お前が来てからそうでもなくなつたが。……さあ私わしはやらなければならぬ。……さあお前はあつちへ行つてお休み。……あの娘が眼でも醒ますといけない。……私わしはあの娘こを愛している。……どうもあの娘には誘惑が多い。……無理はないよああいう身分だから。……あの娘こを幸福にしてやるのが、死んだ兄さんへの大切な義

務だ。……今日は兄さんの死んだ日だったね。……そうだ諸人接待の日だった。……私はこの日が来る度ごとに、鞭撻されるような気持ちがする。いやいや鞭撻されようために、今日を諸人接待の日に、取り決めたのだと云った方がいい。……兄さんは死ぬ前に私にあって、気の毒な手紙をよこしたのだよ。悲痛の手紙と云つてもよいが。……お前は向こうへ行つておくれ。……ああ少し待つておくれ。接待に来てくれた人の中に、変わった人があつたかしら？」

「いいえ」とお豊の云う声が聞こえた。「でも猪之助が来ていました」

「猪之助？ おお猪之助が。……あの破落戸ごろつきが！ 執念深い！ ……兄の悪口を云つていたであろうな」

「ええ申ししておりました」

「去年も来た、一昨年おとしも来た。……普通の日にもやつて来て、私を強請ゆすつたことさえある。……あいつは誤解をしているのだ。……いやいやいや、誤解ではないが。……お豊や、私は気持ちが悪くなった。お前は向こうへ行つて休むがよい」

ここでしばらく話が絶え、やがて足音が聞こえて来た。貝十郎は身を翻えしたが、素早く廊下を右の方へ走り、闇に立つて窺つた。と、すぐにお豊の姿が、戸口から出て庭の方

へ行つた。と、庭から驚いたような、お豊の声が聞こえて来た。

「ま、猪之助さん！ どうしたのです！」

男の答える声でしたが、兇暴な響きを持っていた。

「退け！ 今夜こそ埒らちをあけるんだ！」

「いけません！ ……おお、誰か来てください！」

「敵かたきだ！ 畜生め！ 親の敵だ！ ……待つて待つて待つていたのだ！ ……他国からこ

の地へやつて来て、こんな山の中へ住み込んで！ 金……命を取るか、金を取るかと！

「……やい、放せ！ 埒らちをあけるのだ！」

「危険あぶない！ そんな、刃物なんか！ ……誰か来てください！ あッ誰か！」

（これはいけない）と貝十郎は、素早く入り口の方へ走って行つた。が、こういう瞬間にも彼は疑問を脳裡へ浮かべた。

（俺の耳へさえ聞こえて来たのだ。隼二郎にも聞こえなければならぬ。どうして助けに行かないのだろうか？）——で彼は庭へ飛び出すより先に、隼二郎のいる部屋を覗いて見た。
「いない！ ……どうしたのだ、隼二郎はいない！」

部屋は洋風に出来ていて、巨大な飾り棚や頑丈な卓や、椅子や書架が置いてあり、卓の

上には杉田玄伯や、前野良沢や大槻玄沢や、貝十郎にとっては知己にあたる、そういう蘭医達の家々で見かける、外科の道具類が置いてあり、書棚には書物が詰めてあった。

その部屋に隼二郎がいないのである。では隣室へでも行ったのであろうか？ いやその部屋は四方壁で、出入り口は一つしか附いていなかった。窓はあったが閉ざされていた。そうして一つだけの出入り口からは、お豊が出て行ったばかりであつて、隼二郎は出ては行かなかった。それは貝十郎も見て知っていた。

(これはいつたいどうしたことだ)

八

しかし貝十郎は部屋の中へはいつて、隼二郎を探そうとはしなかった。この時またも庭の方から、女と男の叫び声が、逼迫して聞こえて来たからであつた。で、貝十郎は飛び出して行つた。月光の中でお豊と猪之助とが——諸人接待の馳走の席で、憎々しい反抗的態度と言葉とで、征矢野家の先代の悪口を、憚らず云っていたごろつきのような男——その猪之助とが格闘していた。と、前方から一つの人影が、二人目がけて走って来た。

「鏡ちゃん！ いいところへ！ 早く来ておくれ！」

「姉さん！ あぶない！ ……おのれ猪之助！」

「何を、こいつら！ 邪魔をするな！」

二人の格闘が三人となった。貝十郎は走って行こうとした。悪酔いがいまだに醒めなかった。足が云うことを聞かなかった。

「わッ」「斬ったな！」「態さまア見やアがれーッ」「あれーッ！ 皆さん！ 来てくださいヨ——！」

一人が地上へぶつ倒れた。と、つづいてもう一人倒れた。そこから一人が走り出して来た。

「待て！」と貝十郎は身を挺して、走って来た猪之助を遮さえぎろうとした。体が云うことをきかなかった。

「邪魔だ！ こいつも！」

ドツとぶつかった。よろめいた貝十郎の横をすり抜け、土蔵づくりの建物の中へ、猪之助は一散に走り込もうとした。と、赤い一点の火が、花の蕾のような形を取って、建物の入り口から現われた。扉がその背後うしろで閉ざされている。

「ね、叔父様はお仕事中よ、ですからはいっちゃアいけませんの」

焰の立っている蠟燭を持ち、その光に顔を輝かせ、佇んでいる娘がそういうように云った。それは他ならぬお三保であった。隣りの部屋に眠っていたところ、庭での騒ぎが起ったので、驚いて様子を見に来たものらしい。処女らしい美しさが驚きのために、純粋性を増して見えた。唇がポツとひらいている。眼が大きくひらいている。

「ああ、あなた猪之助さんね。……どうなさいました、ヒ首など持って。……」

「……………」

静が動を制したらしい。猪之助は呆然として突っ立っていた。

地下室は決して暗くはなかった。

明るい燈ともしび火に照らされて、その地下室の上にある部屋——隼二郎の部屋の舶来の、いろいろの外科の道具よりも、もつといろいろの外科の道具が、卓や棚に備えつけられてあった。そうしてその地下室の一所に、立派な柩が二つ置かれてあり、その中に二つの骸骨が研究材料のように置かれてあった。

そうしてその側の机によって、庭に騒ぎなどあろうとも知らず、隼二郎が手紙を読んで

いた。それは古びた手紙であつて、諸人接待の日が来るごとに、読むことに決めている手紙であつた。

「弟よ、私は自殺をする。私は家を興そうとして、物質ばかりに齷齪あくせくした。そうしてそのため二人の人をさえ殺した。一人は大金を持っていたからだ。一人は私の犯罪を知つて、恐喝をしに来たからだ。自責のために私は死ぬ。私が縊死をした松の木の下を、試みに掘つて見るがよい。二つの骸骨が出るであらう。私の殺した二人の人の骨だ。……お蔭で私は財を貯えた。お前に善用して貰いたい。私と違つて学究のお前だ。その方面で尽くしてくれ。娘を頼む、三保を頼む」

後日貝十郎は人に語つた。「征矢野周囲といえは木曾の蘭医で、骨格の研究では最も早く、よい文献を出している人で、その方面では有名なのだそうです。隼二郎がつまり周囲なのです。例の二つの骸骨で、実地研究をしたのだそうです。お豊という女は悪人ではなく、周囲が江戸にいた頃から、周囲を愛していた女なので、周囲が木曾へはいつてからは、家政婦として入り込んで来て、周囲の研究を助けながら、周囲と夫婦になろうとしたのです。ところが周囲は真面目なので、姪のお三保に婿を取るまでは、夫婦にならないと云つ

ていたのです。そこでお豊は弟を呼び寄せ——鏡太郎というのはお豊の弟で、これも大した悪人ではなく、軟派の不良の少年だったのですが、弟とは云わずに附近に住ませ、お三保とくつつけようとしたのです。お三保が誘惑に応じないので、誘拐しようとしたのです。だが可哀そうに鏡太郎もお豊も、猪之助に切られたのが基となって、間もなく死んでしまいました。猪之助ですか、ありやア解りません。二つの骸骨の縁辺みよりなのか、秘密を知っていて強請ゆすりに来たものか、その辺ハッキリ解りません。素ばしっこく逃げてしまいましてね、その後行方ゆくえが解らないのです。……どっちみち私は田舎は嫌いだ。田舎へ行く目違いをします。……征矢野家の先代の罪悪を、あばけば発くことは出来るのですが、そんな必要はありませんでした。隼二郎氏が真面目にやっているのですから、浄罪的な立派な仕事ですよ」

妖説八人芸

昼の海は賑わっていた。人達が潮を浴びていた。泳ぎ自慢に沖の方へ、ズンズン泳いで行く若者もあつた。渚なみざさに近い浅い所で、ボチャボチャやっている老人もあつた。そうかと思ふと熱い砂の上へ、腹這つている中年者もあつた。小舟に乗つて漕ぎ出す者もあれば、小舟に乗つて歸つて来る者もあつた。棧橋の上を彷徨さまよいながら、海にいる人達を眺めている、女や子供の群もあり、脱衣場で着物を脱いでいる者もあつた。

岸に近い海は濁つていたが、沖の方へ行くに従つて、緑の色を深めていた。波が来た！大きな波が！波が崩れて飛沫しぶきを上げた。と、そこから笑い声が起こつた。

帆船が遠くの海の上を、野茨のように白く蠢うごめいていけば、浜の背後を劃している、松林が風で揺れてもいた。海は向こうまで七里あり、対岸には桑名だの四日市だの、名高い駅路うまやしが点在していた。

よく晴れた日で暑かつた。

と、一人の美しい娘が、島田鬻をつやつやと光らせながら、貸し別荘のある林の中から、供も連れず一人で歩いて来たが、ひよいと砂地へかがみ込んだ。彼女の前にある物といえ、脱ぎすてられた潮湯治客の衣裳や、潮湯治客の持ち物であつた。

彼女は間もなく立ち上がった。そうしてソロソロと歩き出した。何んの変わったこともない。とまた彼女はかがみ込んだ。彼女の前にある物といえは、脱ぎすてられた潮湯治客の衣裳や、潮湯治客の持ち物であった。

彼女は間もなく立ち上がった。そうしてソロソロと歩き出した。何んの変わったこともない。と彼女は脱衣場へ上がり、あたりを見廻して佇んだ。

派手な模様の白地の振り袖、赤地の友禅の単ひとえおび帯、身長せいが高く肉附きがよく、それでいて形の整った体へ、垢抜けた様子にまどつている。そういう姿を衆人に見せて、彼女は佇んでいるのであった。またも彼女はかがみ込み、やがて立ち上がって脱衣場を下りた。何んの変わったこともない。

しかし程経て潮湯治客達は、あちでもこちでも騒ぎ出した。

「おや財布を盗まれたぞ」

「俺も印籠を盗まれた」

「掏摸すりが入り込んでいるらしい」

「どこにいる、捕えろ、叩きのめせ」

しかし彼らは例の娘が、犯人であろうとは気がつかなかった。が、たった一人だけ、気

がついている者があつた。ずっと向こうを彷徨さまよっている、例の娘を見やつたが、

「あのお方はあんな大きな仕事を、懸命に計画していられるのに、あいつはそれに参画していながら、あんなちつぽけな小泥棒を、こんな所でやろうとは。……親の心児こ知らずというやつだな。大きな計画の方へ眼をつけている俺だ、ああいう小仕事は見遁のがして置こう」

その人物は呟いた。

潮湯治客を目当てにして、浜の幾所かに出している茶屋の、その一軒の牀几に腰かけ、茶を呑んでいた武士であつて、編笠を冠つているところから、その容貌は判らなかつたが、黒組くろぐみの羽織、蟬塗りの大小、威も品もある立派な武士であつた。

「おや、あれは、珠太郎殿ではないか」

武士は一ひと所ところを凝視した。

「あの娘に見とれている」

富豪の息子とも思われるような、鷹揚おうようで品のある青年が、ずっと向こうの渚の辺で、扇で胸を煽ぎながら、潮湯治場の賑わいを、面白そうに眺めていたが、例の娘が自分の横を、棧橋の方へ歩いて行くのを見ると、ひどく衝うたれたというふうに、恍惚うっとりとした様子

で見送った。

が、すぐに自分も歩き出し、その娘の後をつけて行つた。

「これは困つたことになつたぞ」武士は呟いて考え込んだ。

「おや、二人は話し出したぞ」

棧橋の上で青年と娘とが、羞はじらいながらぼそぼそと、話しているのが見て取れた。

——その日から十日の日が経つた。

「いつ？」とお小夜は情熱的に訊ねた。

「いつでも」と珠太郎は熱心に答えた。

二人の手はしっかりと握られている。それは七月のことであつて、十三日の月が懸かつていた。

あいびき 構あ曳いをしている二人の者へも、月光は降りそそいでいた。ここは尾張領知多の郡、大野の宿の潮湯治場（今日のいわゆる海水浴場）で、夜ではあつたが賑にぎわつていた。珠太郎は二十歳の青年で、尾張家御用ごようたし達の大町人、清洲越十人衆の一人として、富と門閥とを誇つている、丸田屋儀右衛門の長男であつた。

お小夜はというに十数日前から、潮湯治に江戸からやって来た、筒井屋助左衛門という商人の娘で、年は十九だと云うことであつたが、それよりは老けているようであつた。珠太郎の家の夏別荘が、大野にあつてその別荘へ、珠太郎は潮湯治にやって来ていた。浜で再々お小夜と逢つた。並々ならぬその美貌と、洗い上げた江戸前の姿とが、珠太郎を魅さないでは置かなかつた。で二人は恋仲となつた。

珠太郎は名古屋屋という退嬰的の都会の、老舗しんせの丸田屋の箱入り息子なので、初心うぶで純情で信じ易かつた。お小夜の性質はそれとは異つて、計画的のところがあつた。何かを珠太郎に対してたくらんでいる——と云つたようなところがあつた。

「江戸へ行きましょう」と云い出したのは、珠太郎でなくてお小夜であつた。駈け落ちをしようと云い出したのである。

最初珠太郎は顫ふるえたいほどにも恐れた。でもいつの間にか従うようになった。

今宵などはお小夜に「いつ？」と訊かれて「いつでも」と云うほどになつていた。

夏別荘には相違なかつたが、大家の丸田屋の別荘なので、お屋敷と云つてもよいほどに、大きくもあれば立派でもあつた。

今二人が媾あいびき曳びきをしている、裏庭なども林かのように、茂つていた木々によつて蔽おほわれて

いた。木々を通して向こうに見える、二階建ての建物から華やかな笑いと、華やかな灯火とが洩れて来ていた。丸田屋の主人が客を招よんで、夜宴をひらいているからである。

芙蓉の花がにわかには揺れた。お小夜の袖が煽あおったからである。そのお小夜の左右の手が、珠太郎の背に廻まわっていた。

「それでは明後日あさっての夜。……ね、珠太郎様」

「明後日あさっての夜？ ……ええ、きつと。……」

「まず名古屋まで通し駕籠で。……」

「通し駕籠で、……参りましょうとも」

「詳細くわしい手筈は明日の晩に、やはりここで致しましょうよ」

「ええここで、明日の晩に。……」

珠太郎の頬にお小夜の髪が触れた。と、その時少し離れた、築山のあるほりから、突然笑う声が聞こえて来、つづいて話す声が聞こえて来た。

「アツハツハツ、どうしたものだ。そんな殺生まねな真似はしない方がいい」

「これはこれとはんだ話で、あなた様こそ殺生まねな真似など、なさいません方がよろしいよ
うで」

「何を馬鹿な、オチフルイ十二神め！」

「館林様こそよくございません」

その後の事を十二神貝十郎は、後日次のように人に話した。

お小夜と珠太郎のあいびき嬉曳をだね、築山の蔭から見ているのは、我輩わがはいばかりではなかったのさ。館林様も見ていたのさ。それを互いに知ったものだから、大声で暴露し合ったのさ。

お小夜と珠太郎のびっくり吃驚したことは！それはほんとに気の毒なほどだった。もちろん二人は逃げてしまったさ。お小夜は外へ、珠太郎は家内うちへな。そこで我輩も外へ出た。

丘を下りると街道で、片側が松林になっている。松林の中からは人声などがしていた。少し行つて左へ曲がった。と、明るい燈の光が見え、沢山の人が集まっていた。

ナー二何んでもありやアしない、潮湯治の客を当て込みにした、薦張りの見世物の小屋があつて、無数の提灯がともつていて、看板を見る人達が、小屋の前に集まっていただけなのさ。

足芸をする若い女太夫、一人で八人分の芸を使う、中年増の女太夫、曲独楽きょくごまを廻す松井源水の弟子、——などというような芸人を、一緒に集めて打っている小屋で、都会ではとうてい見ることの出来ない、大変もないイカモノ揃いなのだが、そこは田舎のことなので、毎夜繁昌はんしょうしていたものさ。

潮湯治というのは海水を浴びて、病気を癒すというのが一つ、水泳自慢に泳ぐことによつて夏の暑さを忘れるというのが一つ、……遊山半分の贅沢な人の、贅沢な療治そのものなだから、夜などは無聊に苦しんでいる。そこでそんなような見世物が掛かつて、繁昌はんしょうをする次第しだいなのさ。

木戸番の老爺おやじが番台の上に坐つて、まねきの口上を述べていた。

「八人芸の真つ最中で、見事なものでございますよ。足で胡弓を弾くかと思うと、口で太鼓たいこの撥はちをくわえ、太鼓を打つのでございますからな。その間に片手で三味線を弾き、片手で鉦かねを打つのでさあ。その太夫が年増でこそあれ、滅法美しい仇者あだなのですからなあ。……団十郎の声色であろうと、菊五郎左団次の声色であろうと、声色であつたらどんな声色でも、一度耳にしたら使つて見せる——と云う器用な太夫さんでもあるので。……八人芸

の真つ最中、さあさあはいつてごらんなされ。……」

しかし老爺はすぐ黙つてしまった。その時一人の年増女が、小屋の口から現われて、

「とんちき、何んだよ、おかしくもない、八人芸は済んだじやアないか、今は独楽こまの曲廻しだよ」

こう伝法に云つたからさ、その女が八人芸の女太夫の、蔦吉という女なのさ。

「おい、蔦吉」

と呼びかけてやった。

「ちよつと来てくれ、訊きたい事がある」

「おや、オチフルイ十二神の殿様でしたか」

我輩は蔦吉を物の蔭へ呼んだ。

「どうだ、大概は大丈夫か」

「はい、大丈夫でございます」

「八人芸のお前なんだからな」

「とんだものがお役に立ちまして。……」

「相手は六人だから訳はあるまい」

「癖を取るのには訳はないんですが、六人が一緒に集まって、話しているところへぶつかるのが大骨折りでございました」

「一緒に住んでいないのだからな」

「みよし屋の寮だけがまあまあで」

「だから俺が教えたのさ。三人住んでいるのだからな」

「娘ツ子が難物でございましたよ」

「そうだったろう、大いに察する」

「いつご用に立てますので？」

「大体明日の晩だろう」

「さようでございますか、よろしゅうございます」

こんなことで我輩は薦吉と別れた。

我輩は好^{ものずき}奇の人間なので、こういう薦吉といったような、やくざな芸人には知^{しりあい}己があり、手なずけることも出来たのさ。

それから我輩は浜の方へ行つた。海は波が高かった。栈橋などもきしんでいた。で浜には幾艘かの小舟が、引き上げられて置かれてあつた。月があつたので明るかつたが、それ

だけに波と波とがぶつかり、白泡立つのが物凄く見えた。

我輩は北の方へ渚なぎさづたいに歩いた。

渚は湾をなして、その行き止まりが岩の岬で、それを廻ると潮湯治場外になり、潮湯治場外の海はわけても荒く、そこで泳ぐ者はめつたになかった。我輩はそっちへ歩いて行った。岬を越して向こう側へ下り、しばらく様子を窺った。

と、松の林の中から、云い争う声が聞こえて来、やがて一人の若い女が、逃げるようにして走り出して来た。

と、五人の男の姿が、松林の外側へ現われ出た。

「困った奴だなあ、止せばいいのに」

「あんな姿であんなことをして、人に見られたらどうするのだ」

「病氣のように好きなんだからなあ、潮湯治つていうやつをよ。どうにもこうにもやり切れない」

「それも毎晩やるんだからなあ」

五人の男達は話し合っていた。

松林の中から燈が見えていた。貸し別荘のみよし屋の寮が、その松林の中にあつて、そ

こでもしている灯火なのさ。

我輩は娘の様子を見ていた。と、どうだろう女だてらに、渚なぎさまで行くなぎさと着物を脱ぎ、全す裸つばだか体かになつて海へ飛び込み、抜き手を切つて泳ぎ出したじやアないか。

それも素晴らしい泳ぎぶりなのだ。

今も云つたとおりこの辺の海は、潮湯治場の外なので、波が荒くて危険なのだ。ところどころに岩さえあつて、うっかりすると岩の角へ、叩き付けられることさえある。それなのに娘は恐れ気もなく、島田の鬚を濡らさないように、乳から上を波から出し、グングン沖の方へ泳いで行くのだ。

月がそいつを照らしている。白い肩、白い頸うなじ、白い腕、白い脛、時々ムツクリと持ち上がつて見える。月がそいつを照らすのだ。

だが間もなく見えなくなつた。遙かの沖へ泳いで行つたからさ。五人の男も見えなくなつた。みよし屋の寮へ帰つて行つたのだ。我輩はしかし帰らなかつた。もう少し見てやろうと思つたからだ。

四半刻ぐらいも経つただろうか、人魚の姿が見えて来た。渚を目掛けて例の娘が、沖から泳いで帰つて来たのだ。潮から上がつて渚なぎさに立つて、手拭いで体を拭き出した時、さす

がの我輩も変な気持ちでしたよ。

な、女は全裸すっぱだか体なのだ。月がそいつを照らしているのだ。グーツと手拭いで体を拭く。そんな時女は羞はずかし気もなく、片足を上へ持ち上げるのだ。とうとう我輩は呟はいてしまつた。

「この様子をあの男へ見せてやらなければならない」と。

衣裳をまとうとみよし屋の方へ、娘は走つて行つてしまつた。

「十二神オチフルイ、お前何んに来たのだ」

翌日の晩のことだつたよ、館林様がこんなように云つて、我輩の席へやつて来られた。

「丸田屋と深い縁故でもあるのか」

「さようで」と我輩は云つてやつた。「丸田屋とは趣味の友でございます」

事実それに相違ないのだ。我輩は役目こそ与力であれ、いわば身勝手自由勤めの身分で、肝心の役より蔵前の札差しなどと、吉原へ行つて花魁おいらんを買つたり、蜀山人や宿屋飯盛ななどと、戯作や詩文の話をしたりして、暮らす日の方が多いのだ。ところで丸田屋は俳人なので、かなり以前から懇意にされていて、我輩が名古屋へ来るごとに、立ち寄つては話し合

つていた。で今年もやって来たのさ。そうして大野の潮湯治場の、丸田屋の夏別荘へも一
再ならず、客としてこれまでも来たことがある。で、今年もやって来たのさ。

「私などよりも館林様こそ、どうして丸田屋の夏別荘などへ、おこしなされたのでござい
ますか！」我輩はこう云つて逆襲してやった。

「俺は部屋住みで自由の身分だ。それに天下に知しりあ己あがある。どこの何者を訪ねようと、
少しも不思議はないではないか」

「これは御意ごいにございます」我輩は心から頷うなずいて云つた。

と云うのはこの人は將軍家の遠縁、元の老中の筆頭の、松平右近將監武元卿の庶子で、
英俊で豪邁な人物で、隠れた社会政策家で、博徒や無頼漢や盗賊の群をさえ、手下にして
使用するかと思うと、御三家や御三卿のご連枝方と、膝組みで話をする事だつて出来る
——そういう人物であるのだからな。

「これは御意ごいにございます」——で、そう云つたというものさ。

「オチフルイ
十二神！」

と、すると館林様は、不意に鋭い口調をもって、こう我輩を呼びかけたものだ。

「この席にいる客人を、お前、何んとか思わないかな？」

「はい、いいえ、別に何んとも。……」

云い云い我輩は座を見廻した。善美を尽くした丸田屋の、夏別荘の大広間には、二十人あまりの客があつて、出された酒肴を前にして、湧くような快談に耽つていたが、その客人はいずれも男で、女は雑つていなかった。

（はい、いいえ、別に何んとも。……）事実我輩はこういうように答えた。がしかしこれは嘘なのだ。何んとも思わないどころではない、いずれもとんでもない客ばかりなのだからな。身分と姓名とを挙げて見よう。

生駒家の浪人永井忠則（今は大須の講釈師）、最上家の浪人富田資高（今は熱田の寺子屋の師匠）、丹羽家の旧家臣久松氏音（今は片端のわか神官）、那須家の浪人加藤近栄（今は鷹匠町の町道場の主）、土方家の浪人品川長康（今は虚無僧として一所不住）、大久保家の旧家臣高橋成信（今は七ツ寺の大道売卜者）、青山家の浪人西郷忠英（今は寺町通りの往生寺の寄人）、桑山家の浪人夏目主水（今は大道のチョンガレ坊主）、久世家の旧家臣鳥井克己（今は大須の香具師やしの取り締まり）、石川家の浪人佐野重治（今は瑞穂町の祭文かたり）、小笠原家の旧家臣喜多見正純（今は博徒の用心棒）、植村家の浪人徳永隣之介（今は魚ノ棚の料理人）、堀家の旧家臣稻葉甚五郎（今は八事の隠亡かしらの頭）、小堀

家の浪人笹山元次（今は瀬戸の陶器絵師）、屋代家の旧家臣山口利久（今は常滑とこなめの瓦焼き）、里見家の旧家臣里見一刀（今は桑名の網元の水夫かこ）、吉田家の浪人仙石定邦（今は車町の私娼宿じやくの主人あるじ）

三

ざつとこういう輩やからなのだ。取り潰された大名達の遺臣、つまり浪人ばかりなのだ。

（昨夜は名古屋の富豪連を招いて、その席で館林様は話をされた。訓諭と懇願とを雑えたような話を。しかるに今夜は浪人連を招いて、慰撫と激励の話をされた。仲介役が丸田屋の主人だ。……警戒しないでいられるものか）我輩は心からそう思ったよ。

「十二神オチフルイ！」と館林様がまた言われた。「お前浪人をどう思うな？」

「は、どう思うとおっしゃいますと？」

「社会的に見てどう思うか？」

「……………」

「浪人とは失業知識階級の謂いだ。……社会の中間に浮動している群だ」

「一番危険な連中だ」

「……………」

「時代の宗教、時代の道徳、幕府の強圧や迫害に屈せず、食って行けないという事実の下に、浪人という浪人の、あるいは潜行的にあるいは激発的に、押し進んで行く目標といえ、政治的革命という一点なのだ。由井正雪の謀反事件も、天草島原の一揆事件も、その指導者は浪人群だった。別木、江戸の騒擾事件から、農村に起こった百姓一揆の、指導者もおおかた浪人者なのだ。そういう危険の浪人者が、今非常に多くなっている。将来益多くなるだろう。何故というに大名取り潰し政策を、幕府が固執しているからだ。徳川が天下を取って以来、二百年近くになっているが除封減祿された大名の数、三百をもって数えることが出来る。石高にして二千万石、一万石の大名から、二百人の浪人は出る。と、これまでに四十万人の、浪人が出ていることになる。さてこれらの浪人に対して、幕府はどういう処置をとっているか？『他所ヨリ牢人者（浪人者の事）参り所有度由申候ハバ吟味ノ上、御断申可シ』——追っ払ってしまえと達^{たつし}を出している。『近年村々へ浪人体ノモノ参、合力ヲ乞、ネだりケ間敷儀申モノ数多有之候間、右体ノモノ召捕候ハバ、直ニ訴可』

——合力もするな、捕えて突き出せ、こう残酷に命じているのだ。こう残酷にあつかわれ
ては、浪人といえどもたまらない。とはいえどうしても生きて行かなければならない。そ
こでどうとう對抗上『近来浪人体ノ者所々へ大勢罷まかりこし越、村方ノ手ニ難およびがたく及、会難儀
候段相聞候』というように、多勢が一緒にかたまつて、押し借りをするようになってしま
い、『近年諸国在々浪人体ノモノ多ク徘徊イタシ、頭分、師匠分杯ト唱、廻場、留場ト号
シ、銘々、私ニ持場ヲ定、百姓家へ参り合力ヲ乞』というように、合力を乞う持ち場をさ
え、定めるようになってしまい、甚しいのに至つては『近来浪人共、槍鉄砲等ヲ大勢シテ
持歩、在々所々ニ於テ及狼藉』——と云うようになってしまった。……槍鉄砲を持ち歩く
に至つては、内乱の萌きざしと云つてもよい。が、それはそれほどまでに、失業知識階級の——
浪人者の心境が、荒すさんで来ているという証拠であり、それほどまでに浪人者の、生活が苦
しくなつて来た。——と云うことの証拠でもある。……ではそういう浪人者の群を、少な
くとも安全に生活させてやる、そういう政策を立つべきではないか。どうだなオチフルイ十二神、
そうは思わぬかな？」

云われて我輩は一言もなかった。それに相違ないのであるから。我輩は閉口して黙つて
しまった。

「十二神！」と館林様は叱るように云われた。「お前、このわしを尾行けて来たのだから。江戸から尾張へ！つけて来たのだから」

「……………」

「邪魔をするな、このわしの仕事を！」

「……………」

「お前も掻い撫での与力ではなく、物の解った人間の筈だ。邪魔をするな、わしの仕事を！」

よい時刻だと思つたので、館林様に挨拶をして、酒宴の席を脱け出して、我輩は庭の方へ忍んで行つた。と、木蔭に人影が見えた。我輩は故意と咳をしてやった。と、一つの人影が、周章あわてて向こうへ逃げて行つた。後に残つたもう一つの影が、家の中へ走つて行くとするのへ、「珠太郎殿」と声をかけて、我輩はそつちへ寄つて行つた。

「お小夜殿と相談がまとまりましたかな」

珠太郎は黙つてうな垂れてしまった。

「浜の方へでも行つて見ましよう」

で、我輩は先に立つて歩いた。

もう話してやってもいいだろう——こう我輩は思ったので、それから思い切つてぶちまけてやった。

「そうです私がこの土地へ来た、最初の日のことでありましたよ、あなたのとこの夏別荘へ、まだお訪ねをしない前でした。潮湯治の様子を見ようと思つて、浜へ行つて茶店へ立ち寄つたものです。すると一人の美しい娘が、潮湯治客の金や持ち物を、巧みに抜き取るじゃありませんか。ひどい娘だと睨んでおりますとね、一人の若者がその娘を、見初めてしまつたじゃありませんか。これは困つたと思ひましたよ。と云うのは不幸なその若者を、元から私が知つていたからです。……他でもありませんあなたなのです。そうして娘はお小夜なのです」

珠太郎がにわかに興奮して、恐ろしい勢いで食つてかかるのを、我輩は笑いながら黙殺してやった。

(もうこれ以上云うことはない。これからはただ見せるまでだ) つまりこんなように思つたからだ。

浜へ出ると風が吹きつけて来た。わけでも強い風であつて、波頭が次々に無数に砕けて、

見渡す限り月の海上は、白衣の亡者が踊っているようであった。

我々は北の方へ歩いて行つた。そうして岩の岬を越えた。珠太郎は恐ろしく不機嫌でもあれば、どうしてこんな変な方角へ、連れて来られたのか不可解だと、そう思っているようなどころがあつた。が、我輩には考えがあるので、説明してもやらなかつた。

海の方へ少し突き出して、その裾が窪んで穴をなしている、そういう岩があつたので、その穴の入り口へ腰を下ろし、我々はしばらく休むことにした。と云つても我輩から云う時は、ここで休むということが、予定の行動になつていたのだが。……

真夏ではあつたが夜は涼しく、それに馨かぐわしい磯の香はするし、この辺に多く住んでいる鶉うしが、なまめかしく啼いたり羽搏はきをしたりして、何んとも云えない風情であつた。

が、我輩は待つていた。早く彼女が来ればよいと。すると松林の方角から、砂を踏む音を幽かすかに立てて、こつちへ走つて来る足音がした。足音は岩の辺で止まつたが、またすぐに聞こえて来た。どうやら岩の上へ上るらしい。ややあつて衣摺きぬずれの音がした。

「珠太郎殿、海の方をご覧」

放心したように考え込んでいる、珠太郎へ我輩は小声で云つた。

「素晴らしいものが見られますよ」

不承不承に珠太郎は、海の方へ眼をやった。もちろん我輩も海の方を見た。と、その二人の視界の中へ、真つ白の物が躍り込んで来た。我々の頭上の岩の頂から、素裸体すっぱだかのお小夜が海へ向かつて飛び込みをやった形なのさ。

水音！ 飛沫しぶき！ 水底へ消えた彼女！ が、すぐに浮き出して、泳いで行く島田鬚と肩と腕！

「あッ、お小夜だ！ お小夜だお小夜だ！」

「さよう、お小夜です。大変なお小夜です。……帰って来るまで見ていきましょう」

かなりの時間が経った時、彼女、お小夜は帰って来た。ヌツクリと海から陸へ上がり、ノシノシと岩へ上がって行こうとした。

「オイ勘介！ 女勘介！」

隠れ場所から身を現わしながら、こう我輩は声をかけてやった。

「ここにお前の情夫がいるんだ。何んて馬鹿な真似をやらかすんだ。……素裸体すっぱだかとは呆れたなあ。……珠太郎殿、お解りですか、あいつは女ではありませんよ。……オイ——勘介、女勘介、他の連中にも云ってやれ、まごまごみよし屋の寮なんかにいるなど！ ……」

同じ夜我輩は館林様を連れ出し、月夜を賞しながら彷徨さまよった。

「誰かが先駆者にならなければいけない」

館林様は我輩に説いた。

「貝を吹き旗差し物をかざし、進む者がなければいけないのだ。でなければいつまでも悪い浮世は悪い浮世のまま居縮いすくんでしまふ」

「そこであなた様が先駆者となつて、事を起こそうとなさいますので？」

「うん」と館林様は仰せられた。「まずそう云つてもいいだろう」

四

「結構なことではございますが。……」我輩は故意わざと皮肉に云つた。「先に立つて進むはよろしゅうございますが、さて背後うしろを振り返つて見て、従ついて来る者のないの時、寂しさ一層でございましょう」

「馬鹿な」と館林様は一笑した。「裏切られたらと云うのだろうが、わしの部下にはそんな者はいない。裏切り者など一人もいない」

振り返つて見ると灯火の光が、まだ丸田屋の夏別荘の、大広間から射していた。浪人達は飲んでいたのである。一晚飲み明かすに相違ない。

私達は丘を下りた。それから街道を左へ曲がり、さらに左へ空地を横切った。月見草の花が咲いていて、早生まれの松虫が鳴いていた。少し行くと松林であり、松林の中に家があった。みよし屋の賃貸しの寮なのである。寮には灯ともしび火が点いていなかった。が、人声は聞こえていた。

「館林様なんかいいかげんなものさ」不意に声高に云う者があつた。「甘いお方さ、大甘者さ！」

館林様は足を止めた。すぐに我輩は館林様へ云つた。

「あなた様のお噂をしております。つまらない手合でございました、お氣にかけてはいけません。さあさあ先へ参りましょう」

しかし館林様は動かなかつた。と、別の声が聞こえて来た。

「要するにあのお方は人形なのさ。看板と云つてもいいかもしれない。俺らを使っているなどと、あのお方は思つていられるようだが、その実あのお方こそ俺達六人に、あやつられておいでなさるんだからなあ」

「そうとも」と別の声が出た。「あのお方が俺達を鼻^{ひしき}にしている、——と云うことが知れているので、俺ら相当悪事をして、お官^{かみ}では目こぼし手加減をしてくれる」

「そうだそうだ」と別の声が出た。「要するにあのお方は丸袴^{がんこ}の子弟^{うぬぼれ}さ。自惚^{うぬぼれ}の強い貴公子なのさ。自分の力を自分で過信し、勝手に幻影を描いている方さ。……名古屋の富豪を呼びつけて金を出せと偉そうに仰せられたが、出す奴なんかありやアしないよ」

「今夜集まって来た浪人者なんか、食いも慣らわなご馳走を食い、かつてなかつた待遇を受け、いい気持ちに大言壮語して館林様を讚美しているが、明日になって自分の古巣へ帰ると、古巣の生活を後生大事に守り、館林様が事を挙げたって、一人だつて従って行きはしないよ」

「俺らにしてからがそうだろう、神道徳次郎、火柱夜叉丸、鼠小僧外伝、いなば小僧新助、女勘介、紫紐丹左衛門、こう六人揃っていたって、心からあのお方に従って行こうと、そう思っている者はないのだからなあ。……女勘介、お前はどうか？ お前の方の仕事はどうなっている？」

「ああ俺らの例の仕事か、俺らあいつは止めてしまった。丸田屋が寝返りを打った場合、苦しめてやる手段として、一人息子の珠太郎を、誘拐して監禁してしまえという、館林様

の吩咐いいつけだったので、そのつもりで骨を折ったんだが、こういう仕事には飽き飽きしている俺だ。投げ出してしまったよ、止めてしまったよ」

館林様の体が顫え、片手が刀の柄にかかった。で、我輩は急いで云った。

「浜の方へでも参りましょう、海など見ようではございませんか」

「うん」

と館林様は云われたが、尚体は顫えていた。それでもとうとう歩き出した。浜にも海にも変わったことはなかった。ただ寂しいばかりだった。

翌朝あくるあさとも云わずその夜のうちに、館林様は大野を去られた。一人で、寂しく、飄然と、裏切られた先駆者の悩みを抱いて。

翌日の晩みよし屋の本店で、蔦吉を招んで我輩は飲んだ。

「お前の八人芸、巧いものだな」

「お役に立って何よりでした」

「よく六人の無頼漢ならざるものどもの、声の特徴を真似したものだ」

「それでも妾はハラハラしました。殿様から教えられた白せりふといえは、あそこまでしかなかつたのですから。あれから先が入用いるようなら、どうしたものかと思ひましてね」

「あれはあれだけでよかつたのだつた」

「それにしても妾には不思議でならない。誰もいないあんなみよし屋の寮で、六人の声色を使うなんて」

「お前にあそこへ行つて貰う前に、三人の男が住んでいたのだ。そうして他にもう三人の男が——そいつらは人目に立たないように、他の貸し別荘にバラバラになつて、めいめい住んでいたのだが、時々あそこへ集まつて、よくないことを企んでいたのさ。が、そいつらはお前が行く前に、あわてて引き上げて行つてしまつた。引き上げさせたのは俺なのだ
がな」

「妾、芸当をやりながら、障子の隙から見ていました、大変品のあるお武家様が、あなた様と連れ立つておいでなさいましたのね」

「あのお方へお聞かせしたかつたのさ、そのお前の芸当をな」

これは後から聞いたことだが、富豪と浪人とを呼び寄せて、館林様が事を起こそうとし

た、——その事というのは謀反などではなく、穏かな政策に過ぎなかつたそうだ。

荻生徂徠が云っている。

「浪人は元来武士なれば町人百姓の業もならず、渡世すべき様なければ、果ては様々の悪事を仕出すものなり、これを生かす法は、その浪人仕官の頃百石取り以上なれば、たとい幾千石に至るとも、地方にて知行五十石ずつ下され、やはりその土地に差し置かれ郷土とすべき也、されば十万石の家潰れても、公儀へ八万石ほど奉りて余の二万石を件くだんの郷土の領とすべし。五十石を不足と思ひ、他所へ立ち去る人は心次第たるべし。ただ、諸士の流浪を不憫に思し召して如かくのごとく此なし給わば、莫大のご仁政なるべし」

こう徂徠は云っている。しかし公儀では採用しなかつた。そこでそれだけの金や米を、大富豪から出させることによつて、浪人の生活を安穩にしてやろう——その実行を名古屋からやろう。と云うのが館林様の計画だつたそうだ。

そうとは我輩は知らなかつたので、それにお町奉行の依田様から、館林様が名古屋へ行かれて、何やら大事をやられるらしい。尾張は御三家の筆頭で、公儀にとつては恐ろしいお家だ。そこで大事を起こされてはたまらぬ。と云つて他領だから江戸町奉行としては、どうにも策の施しようがない。ついではその方個人として出かけて館林様の行動を監視し、

もし出来たら邪魔をするがよいと、こういう吩咐いひつけを受けたので、ああいう行動をとつたのだが、今ではかえって後悔している。そういう館林様の目的だったら、邪魔をするどころか賛成をして、あべこべにお助けしたものを。

が、我輩としては館林様から、あの六人の無頼漢どもを、離間させたことだけはよかつたと今でも心を安んじている。頭領とも云うべき館林様が、それだけの大事業をしておられるのに、潮湯治客の金や持ち物を、こそこそ盗むというような、小さい盗心を蔵している輩を、附けて置くのはよくないからな。

館林様には六人男どもが、本当に自分を裏切つたものと思ひ、爾来彼らを近付けなかつたそうだよ。

青空文庫情報

底本：「十二神貝十郎手柄話」国枝史郎伝奇文庫17、講談社

1976（昭和51）年9月12日第1刷発行

初出：「文芸倶楽部」

1930（昭和5）年1月～6月

※誤植の確認には「国枝史郎伝奇全集 巻4」（未知谷）を用いました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「不頼漢」と「無頼漢」、「女勘助」と「女勘介」、の混在は底本の通りです。

入力：阿和泉拓

校正：小林繁雄、門田裕志

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十二神貝十郎手柄話

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>